

多賀城市文化財調査報告書 第27集

山王遺跡

第10次発掘調査概報

(仙塩道路建設に伴う八幡地区調査)

平成3年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
建設省東北地方建設局仙台工事事務所

山王遺跡

第10次発掘調査概報

(仙塩道路建設に伴う八幡地区調査)

序

多賀城市には、古代東北の政治や文化交流の拠点として栄えたという誇り得る歴史があります。この長い歴史の蓄積を現代に活かし、さらに将来に向けて創造的に継承していくことが本市にとっての大きな目標であり、現在「活力とふれあいのあるまち史都多賀城」をスローガンにかかげ、新しいまちづくりに取り組んでいます。

さて、仙台湾高規格幹線道路の一環として計画された仙塩道路の建設も、こうしたまちづくりに密接な関連をもつものであり、本市では昨年度からこれに伴う発掘調査に着手し、今年度も引き続き調査を実施いたしました。この調査は、当教育委員会と宮城県教育委員会が、工事を担当する建設省東北地方建設局仙台工事事務所とそれぞれ委託契約を締結して行うもので、今年度はインター・チェンジ部分にあたる山王遺跡北東部の八幡地区を調査対象としました。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての数多くの遺構を発見し、特に多賀城国府域における計画的地割を裏付ける道路跡等の遺構や、中世の屋敷跡を幅広い範囲で確認しました。また、これまで多賀城城外では発見例の少なかった奈良時代の建物跡や多種多様の遺物がまとまって発見され、多賀城周辺地域の具体的様子を知るうえで貴重な資料が得られました。

最後に本書を刊行するにあたり、発掘調査の条件整備等に多大なご尽力をいただいた建設省東北地方建設局仙台工事事務所や、野外調査から資料整理まで一環してご指導、ご協力を賜った宮城県教育委員会など関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

1. 本書は、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塙道路建設計画に伴う山王遺跡（第10次調査）の調査概報である。
2. 本書には、平成2年度に多賀城市埋蔵文化財調査センターが担当した地区的成果を収録している。
3. 発掘基準線は、A区の東側に設定した原点（0.0）を通る真北方向の直線を南北基準線とし、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。この原点を0として調査区内に3mの方眼を組み、東西方向は原点から東をE、西をWとして原点から1m離れる毎にアラビア数字でE 1、E 2、E 3……、W 1、W 2、W 3……と表わした。南北方向は原点から北をN、南をSとして同様に表わした。原点の国家座標はX = 188,880.000m、Y = 13,230.000mである。
4. 遺構は、発見順に一連番号を付した。但し、隣接地を同時に調査している文化財保護課担当分との重複を防ぐため、5001番からとした。
5. 土色については、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を参照した。
6. 第1図は、5千分の1の多賀城市都市計画図を複製して使用した。
7. 発掘調査及び本書の作成に際しては、宮城県教育庁文化財保護課の佐藤則之、菅原弘樹、天野順陽、高橋栄一氏のご教示に負うところが大きい。また次の方々及び機関から指導、助言を得た。（敬称略）

斎藤孝正（文化庁）

平川 南、永嶋正春（国立歴史民俗博物館）

沢口 澤

宮城県教育庁文化財保護課

東北歴史資料館

宮城県多賀城跡調査研究所

8. 本書は、調査を担当した千葉孝弥と石本 敬が執筆、編集した。なお、それらの作業を菊池豊、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子が援けた。
9. 発掘調査の記録、出土遺物は、多賀城市教育委員会が保管している。
10. 本書と現地説明会資料等で内容が異なる場合は、本書が優先するものである。

調査要項

1. 遺跡名 山王遺跡（宮城県遺跡登載番号 18013）
2. 所在地 宮城県多賀城市南宮字八幡 120・121他
3. 調査面積 4,000m²
4. 調査期間 平成2年4月16日～12月19日
5. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
6. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 斎藤 一司
主査 赤坂 みゑ子
研究員 滝口 卓 石川 俊英
〃 千葉 孝弥 石本 敏（本調査担当）
技師 相沢 清利
7. 調査補助員 菊池 豊
8. 調査参加者 赤間かつ子、芦野しづ子、阿部けい子、阿部トシ子、阿部敏子、遠藤一代、阿部美智子、阿部美津子、大友良子、大山貞子、小野玉乃、小野寺恵子、小笠原マキ子、加藤昭一、加藤文一、菅野恵子、熊谷あつ子、熊谷きみ江、熊谷好子、後藤恵子、後藤はつみ、後藤みよ子、桜井エイ子、佐々木四郎、佐々木忠志、斎藤忠次郎、佐藤容子、下道博信、菅原綱代、鈴木一郎、高野敏子、武田りき、千葉幸一、角田静子、平山節子、星忠次郎、松浦正、松本喜一、水越良子、渡辺園恵、渡辺幹子、渡辺ゆき子、菊地みち子、相沢けい子、杉田美貴子（遺物整理員）

本文目次

序文

例言

調査要項

I. 調査に至る経緯と調査経過	1
II. 発見遺構と遺物	5
1. 層序	5
2. 古代	5
A. 道路跡	6
B. 掘立柱建物跡	13
C. 整穴住居跡	13
D. 井戸跡	16
E. 溝路	21
F. 土塙	22
3. 中世	32
A. 掘立柱建物跡	32
B. 溝路	33
C. 井戸跡・土塙	40
III. まとめ	42
写真図版	45

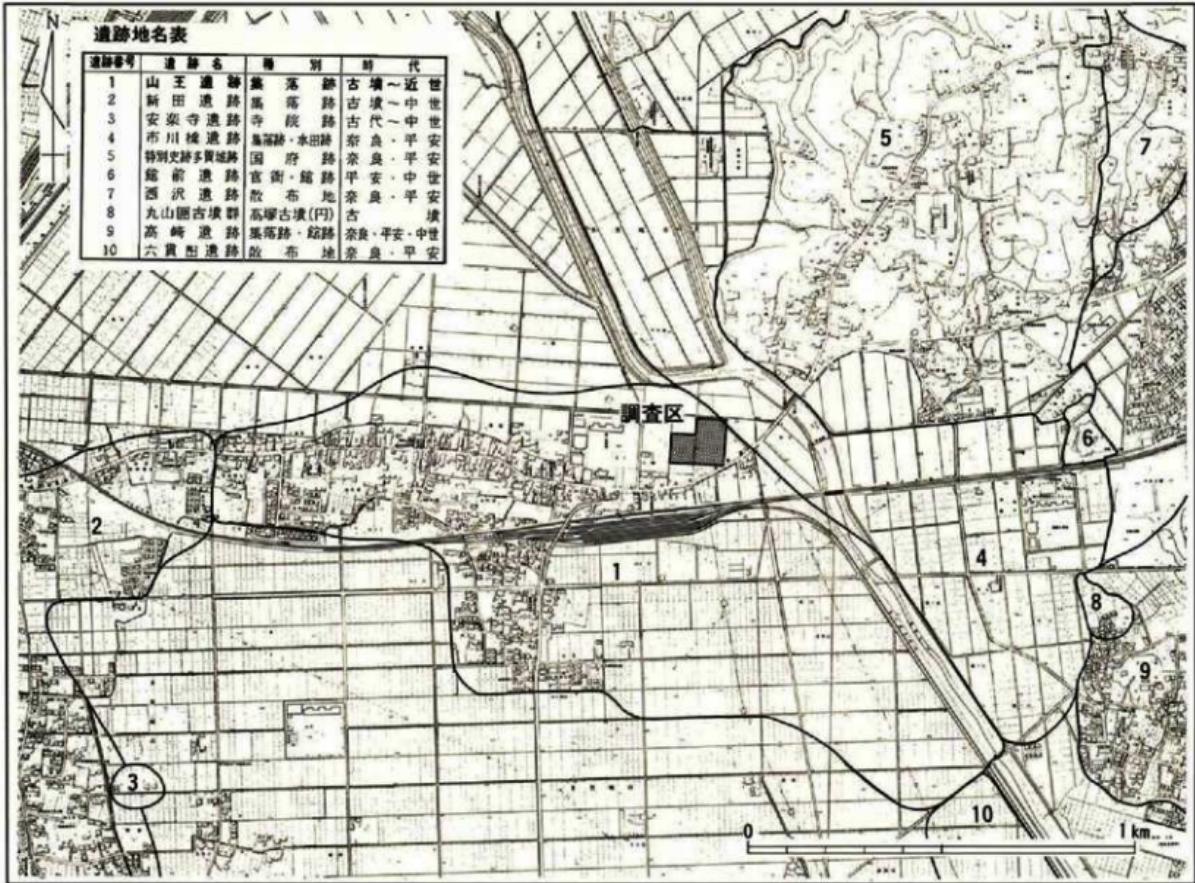
I 調査に至る経緯と調査経過

仙台湾高規格幹線道路事業計画の一環として建設計画された仙塙道路は、仙台市中野から多賀城市を経て利府町春日に至る7.1kmの自動車専用道路である。このうち、多賀城市内を通る路線敷内には、埋蔵文化財包蔵地として山王遺跡と市川橋遺跡がかかることが当初から明らかになっていた。さらに、昭和57年に宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分布調査を実施したところ、前記の二つの遺跡の南側に新たに包蔵地が発見され、六賀田遺跡として登録するに至った。この結果、多賀城市内では路線敷内の全てに遺跡がかかることになり、特に山王遺跡は、これまで特筆されてきた古代陸奥國府多賀城と密接な関連をもつ大規模な集落跡としての性格ばかりでなく、古墳時代や中世においても居住域として幅広く利用されてきたことを裏付ける数多くの遺構・遺物が発見されていることから、長期的な見通しを持った調査の必要性を考えられた。

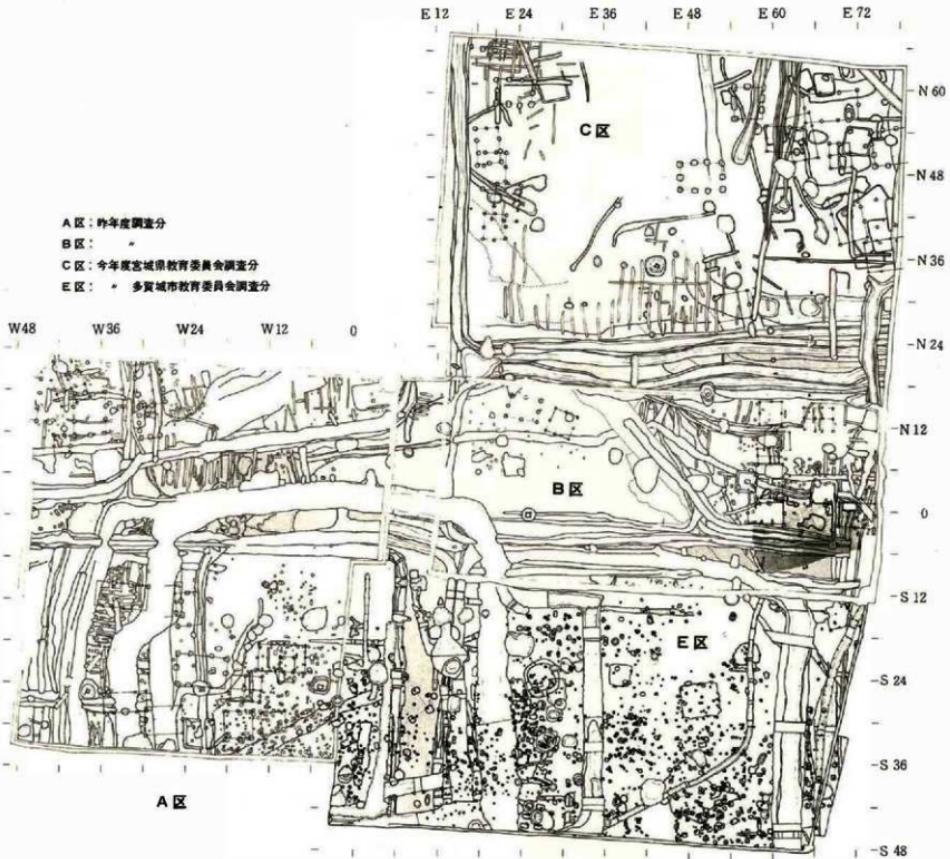
多賀城市教育委員会における本事業とのかかわりは、仙塙道路建設を担当する建設省東北地方建設局仙台工事事務所から宮城県教育委員会を通して調査依頼の打診を受けた昭和57年にさかのぼる。その後内部での調整を経て、昭和63年7月に三者による第一回の連絡会を開催するに至った。協議の結果、平成元年度より発掘調査を受託することとし、はじめにインカーチュンジ予定地を対象として調査を実施することに決定した。この年度は、7,000m²の対象地域のうち5,000m²は宮城県教育委員会が、残りの2,000m²については多賀城市教育委員会が分担することとなり、それぞれ東北地方建設局と委託契約を締結した後、本市担当分は7月から12月にかけて調査を実施した。この調査においては、方形に堀を巡らせた中世の屋敷跡や、計画的な「地割り」の存在を指摘できる古代の道路跡や建物跡などが調査区のはば全域で発見されている。なお、調査区が隣接したことから、調査概報は宮城県教育委員会が相方の成果をまとめたうえで執筆、刊行している（宮城県文化財調査報告書第138集）。

今年度の調査は、昨年度の調査区B区の南側に位置するE区の事前調査と、その東側に位置するF区の確認調査で、合わせて4,000m²を対象とした。調査期間は4月16日から12月19日までである。また、宮城県教育委員会もほぼ同様の期間で、本市担当分の北側に位置するC区とD区を調査し、10月には共同で現地説明会を開催している。野外調査後の遺物整理については両教育委員会がそれぞれ担当した地区からの出土遺物を分担して行ない、調査概報は密接な協議や連絡をとり合いながら、今年度は別個に執筆、刊行することとした。

なお、東北地方建設局との契約方法は、昨年度と同様別々に委託契約を結び、独自に会計予算を組んで調査費用を支出した。また当教育委員会においては、12月の野外調査終了事点で契約金額に減少が生じる見込みになったことから、平成3年2月付けで契約変更を行っている。



第1図 遺跡分布図



第2図 造構全体図

II 発見遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は道路跡1条、掘立柱建物跡26棟、柱列跡3条、竪穴住居跡6軒、井戸跡14基、土塙14基、溝跡20条などである。年代は古墳時代から江戸時代に及んでいる。また、これらの遺構や堆積層、表土からは土師器、須恵器、赤焼き土器、陶磁器、瓦、木製品、金属製品、土製品、植物遺体、貝、骨などが大量に出土している。本書では、古代・中世の遺構の内、主なものについて概要を報告し、他は後日刊行予定の正式報告書に譲りたい。

1. 層序

調査区はかつて大部分が水田として使用されていたため、その部分については周辺一帯の地盤となっている黄褐色の砂層まで削平を受けている。しかし、畠地として利用された部分では中世の堆積層が残っており、それを媒介として新旧二時期の遺構を段階的に調査することが可能であった。また黄褐色の砂層は多くの層に細分できるが、それらの中にはわずかであるが遺物を含んでいるものがある。以下それらの概要を説明するが、いずれも部分的なものであり相互の関係は把握していない。

I 層 表土

II 層 暗褐色(10Y R 3/4)シルト。調査区西壁際にのみ分布している。この層上で土塙1基を検出している。

III 層 にぶい黄褐色(10Y R 3/4)シルト。調査区中央部の旧畠地部分にのみ残存している。中世の遺構はこの層の上面から掘り込んだものと、この層におおわれるものとがある。

IVa 層 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂。調査区南東隅にのみ分布。炭化物粒が多く含まれている。滑石製の臼玉が大量に出土した。

IVb 層 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。調査区中央部の北側にのみ分布。古墳時代中期の土器が出土している。上面は古代以降の遺構確認面となっている。

IVc 層 黄褐色(2.5Y 6/4)砂～砂質土。地山の砂層である。IVa～IVb層の下をすべてIVc層と一括した。遺物は含んでいない。



第3図 土層模式図

2. 古代

古代の遺構としては道路跡1条、掘立柱建物跡16棟、柱列跡1条、竪穴住居跡6軒、井戸跡3基、土塙7基、溝跡6条などを発見した。

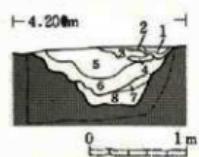
A. 道路跡

[S X5150道路跡] 南北方向に走る道路跡である。東西両側に素掘りの側溝を伴っており、西側のものが S D 5064溝跡、東側のものが S D 5078溝跡である。それぞれほぼ同位置で4時期の変遷が認められた（古い順に S D 5064 A → B → C → D、S D 5078も同じ）。S D 5064溝跡はA区で検出した側溝 S D 88溝跡、S D 5078溝跡はB区で検出した側溝 S D 161・192・162溝跡とそれぞれ合流している。路面には軽装した痕跡が認められず、堆積層も検出できなかった。

S X5150 A 東側溝 S D 5078 A が残存状況不良のため路幅は計測し難い。凡そC期のものと同規模と考えられる。西側溝 S D 5064 A は、S E 50田の東側のトレンチでみると断面形は逆台形を呈し、上幅0.8m以上、下幅0.5m、深さ0.8mを計る。埋土は黄褐色や暗灰黄色の薄い砂の層が交互に堆積しており、自然堆積した様相を呈している。遺物はほとんど出土していない。

S X5150 B 東側溝 S D 5078 B が残存状況不良のため路幅は計測し難い。凡そC期のものと同規模と考えられる。西側溝 S D 5064 B は、断面形が緩やかなV字状や舟底状を呈している。規模は上幅1.4m、深さ0.5mを計り、埋土はA期のものと類似している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶などが出土地している。土師器杯にはロクロ調整後底部を回転ヘラケズリしたものがあり、須恵器杯にはロクロからの切り離しが静止糸切りの後回転ヘラケズリを加えたものや回転糸切りのままのもの、ヘラ切りのままのもの、手持ちヘラケズリしたものなどがある。

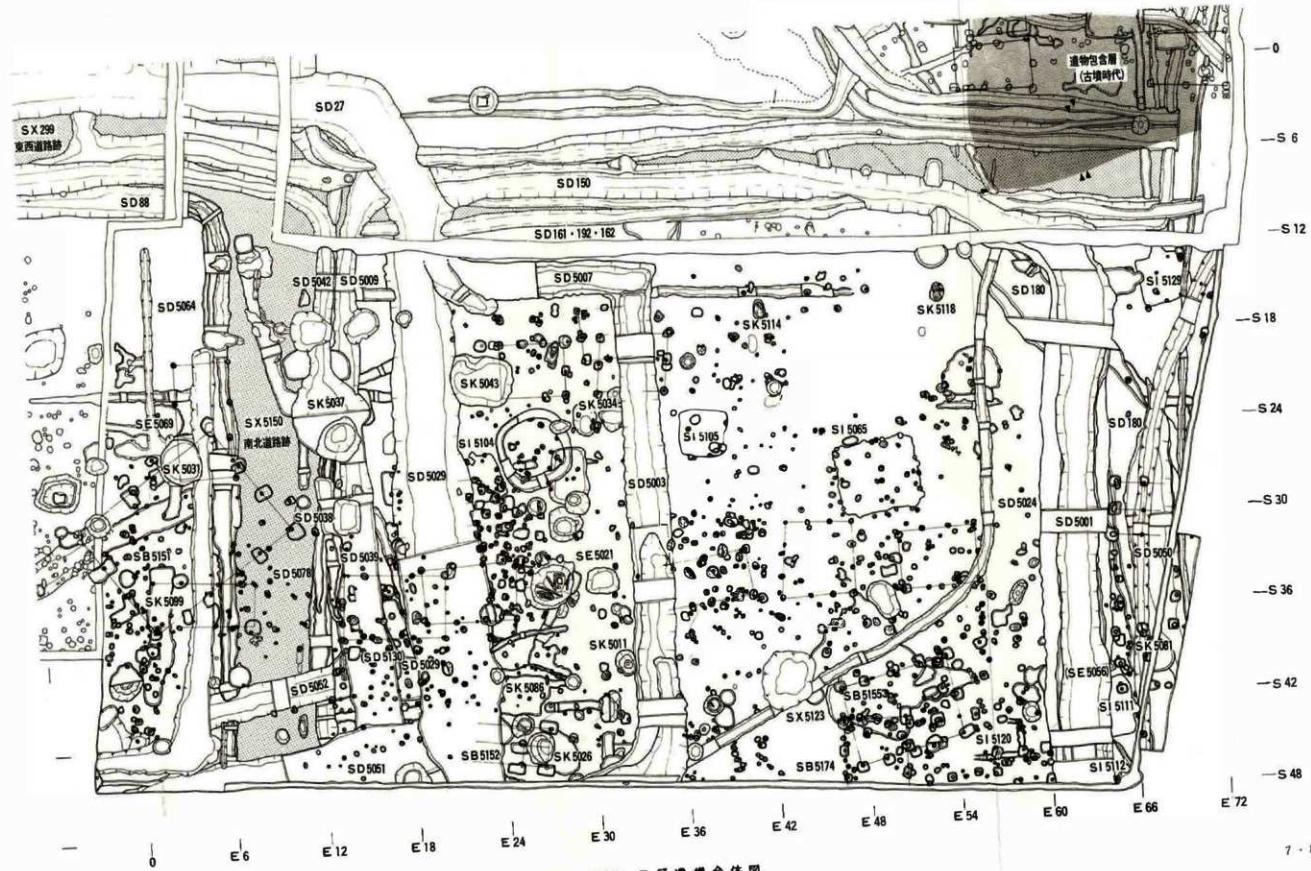
S X5150 C 本期は4時期を通して最も残存状況が良好である。路幅は両側溝の心々で計ると6.2mである。方向は西側溝 S D 5064 C の最も直線的な S 18～S 38間ににおける底面の中軸線で計ると北で2度11分東に偏している。S D 5064 C は規模が上幅1.2～0.6m、深さ0.3mを計り、埋土はにぶい黄褐色や灰黄褐色のシルトである。S D 5078 D は規模が上幅0.8m、深さ0.3mを計り、埋土は灰黄褐色のシルトである。遺物はS D 5064 C から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、灰釉陶器碗、漆器碗、S D 5078 C からは土師器杯・甕、赤焼き土器杯などが出土している。S D 5064 C から出土している灰釉陶器碗は2点あり、いずれも黒帯90号窯式に比定できる東濃産の製品である。漆器碗は口縁部の小片であるが、内外両面に黒漆を塗ったものである。



土層観察図

層位	土 色	土 性	層 号	層位	土 色	土 性	層 号
1	灰 黄 褐 色 (10Y R 5/5)	粘土質シルト	D	5	灰 黄 褐 色 (10Y R 5/6)	粘土	西半に砂體を多く含む
2	黑 暗 褐 色 (10Y R 5/6)	粘 土	•	6	褐 色 (10Y R 5/6)	•	黄褐色砂ブロックを多量に含む
3	にぶい黄褐色 (10Y R 5/5)	粘土質シルト	C	7	黄 褐 色 (2.5Y R 5/6)	砂	黄褐色砂ブロックを含む
4	• (+)	シ ル ト	砂粒、黄色土塊を多く含む	8	唯灰黃色 (2.5Y R 5/6)	•	黄褐色粘土ブロックを含む

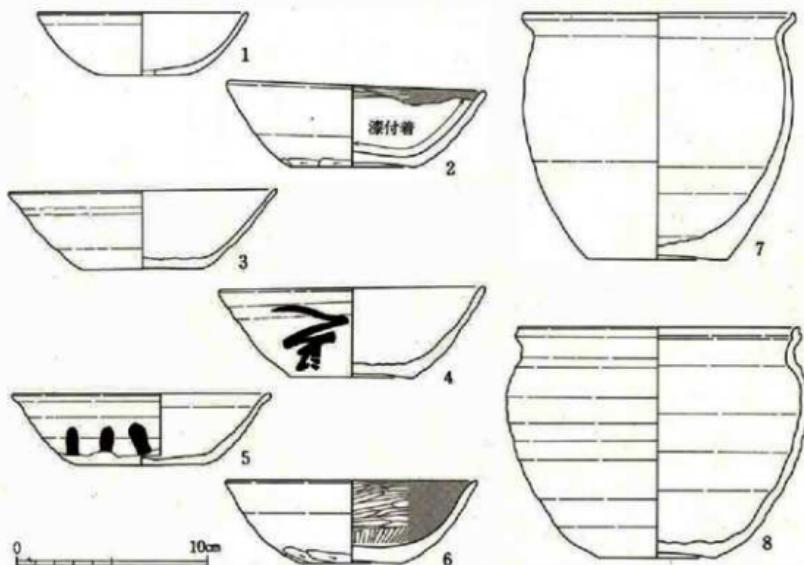
第4図 S D 5064溝跡（道路西側側溝）セクション図



第5図 E区遺構全体図

SX 5150 D 本期は4時期を通して最も残存状況が不良であり、SD 5064 DはS 27ラインまで、SD 5078 DはS 33ラインまでしか検出できなかった。路幅は両側溝の心々で計ると5.3mである。SD 5064 Dは規模が上幅0.6~0.4mで深さは0.1mを残すのみである。埋土は黒褐色の粘土質シルトである。SD 5078 Dは規模が上幅0.5mで深さはわずかに5cmを残すのみである。遺物はSD 5064 Dから土師器杯・高杯・甕・須恵器杯・蓋・瓶・甕・赤焼き土器杯・灰釉陶器碗・綠釉陶器碗、SD 5078 Dから土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・高台付杯・高杯・瓶・甕・赤焼き土器杯・高台付杯などが出土している。灰釉陶器碗は黒窓90号窓式に比定される東漢産の製品である。

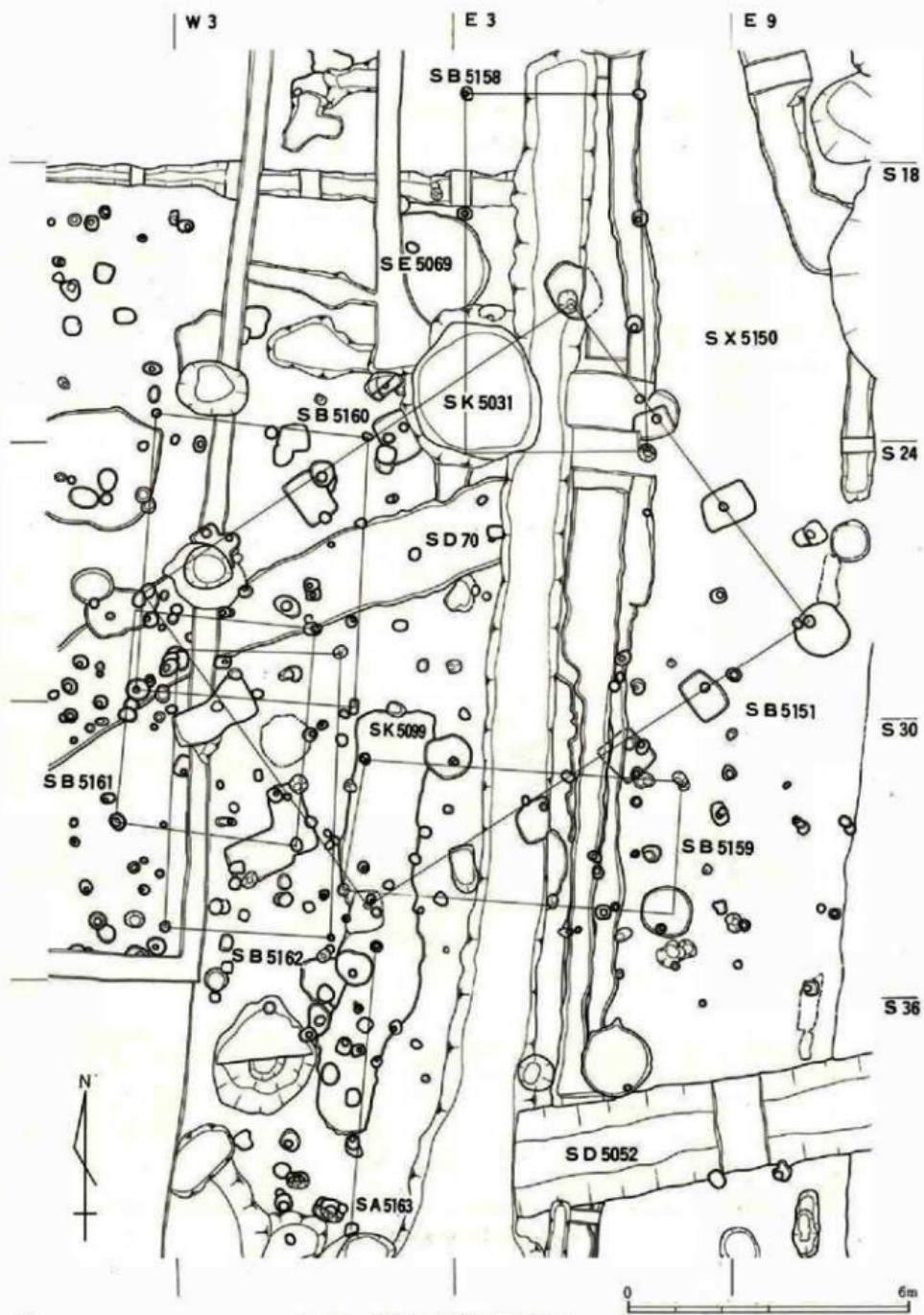
なお、本道路の南端部では、東側溝SD 5078の東壁に東西にのびるSD 5141が連結している。



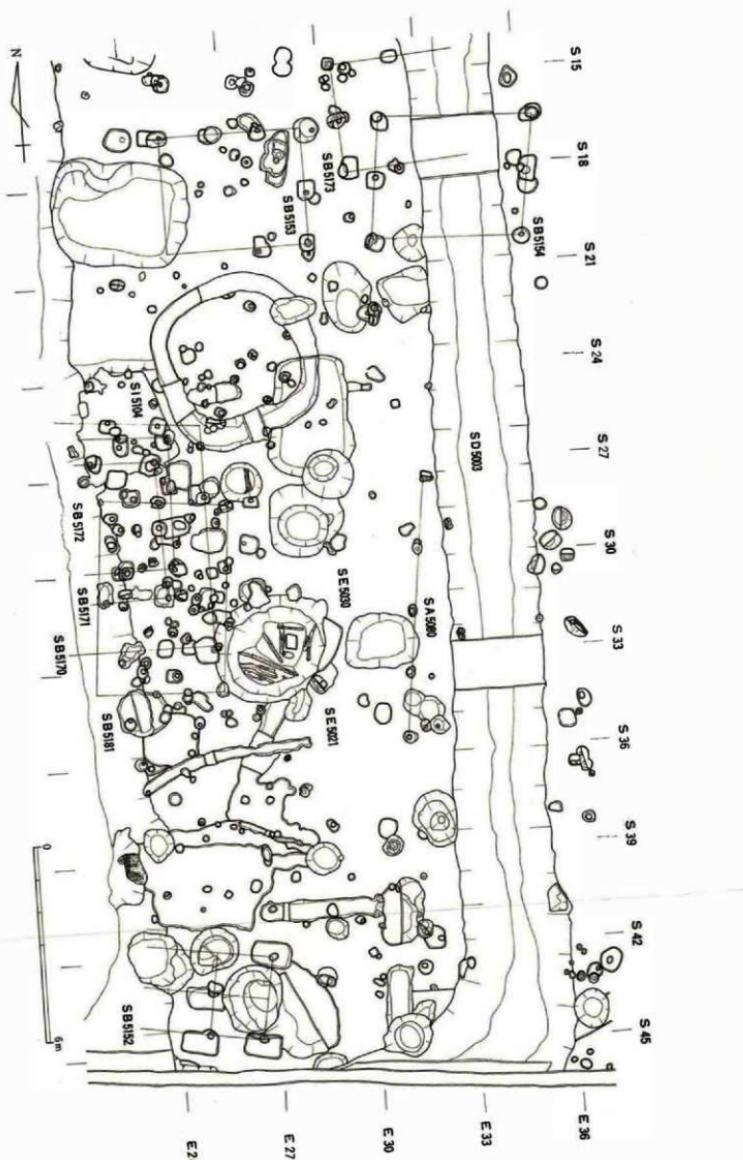
単位:cm ()は推定値

No.	種別	品種	層位	外観概要	内面概要	口径	底径	高さ	壁厚%	底厚%	備考
1	赤焼き土器	杯	C期1層	ロクロナデ、底部回転未切り	ロクロナデ	11.0	(4.8)	3.3	R-298	6-1	
2	土師器	+	B期2層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黑色処理	13.6	6.6	4.3	R-307	6-2	内面漆付着
3	須恵器	+	B期1層	ロクロナデ、底部回転未切り	ロクロナデ	(14.0)	6.3	4.1	R-301	6-3	底盤ヘラ削り
4	+	+	+	+	+	14.0	6.5	4.7	R-302	6-4	
5	+	+	B期2層	+	+	(13.5)	6.5	3.8	R-303	6-5	
6	土師器	+	A期1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黑色処理	(13.2)	5.4	4.3	R-309	6-6	
7	須恵器	甕	C期1層	ロクロナデ、底部回転未切り	ロクロナデ	(14.3)	7.4	12.8	R-297	6-7	
8	+	+	+	+	*	(14.7)	6.2	12.0	R-299	6-8	

第6図 SD 5064溝跡出土遺物



第7図 調査区西端部造構配置図



第8圖 調查區中央隧道網配置圖

B. 据立柱建物跡

調査区中央部及び南東隅で多く発見している。地山上で検出しているものが多く、中世以降のものとの区別が困難なものがある。また、部分的な検出にとどまったものも多い。以下、主なものについて説明する。

[SB 5151建物跡] 調査区西端部で検出した桁行5間、梁行3間の東西棟である。SD70とSK509より新しいが他の遺構より古い。北側柱列の東より1間目の柱穴は中世のSK5031によって破壊されているが、他の柱穴はすべて検出した。12個の柱穴で柱痕跡を確認しており、その内9個の柱穴では下部に柱材が遺存していた。方向は南側柱列でみると東で33度33分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長約11m、柱間は西より2.19m・2.38m・2.10m・約4.4m（2間分）、南側柱列では総長11.33m、柱間は西より約2.4m・約2.0m・約2.3m・2.00m・2.66mである。梁行については、東妻で総長約8.5m、柱間は北より約3.1m・2.37m・3.09m、西妻では総長8.53m、柱間は北より2.94m・2.47m・3.03mである。柱穴は長辺約1m、短辺0.8~0.7mの長方形を基調とするが不整形を呈するものもある。南東隅の柱穴には径30cmの柱材が遺存していた。遺物は、掘り方埋土から土師器と須恵器の細片が数点出土している。

[SB 5155建物跡] 調査区南東隅の地山上で検出した桁行4間、梁行2間の東西棟である。SX5123より新しく、SB5174より古い。柱穴はすべて検出し、柱痕跡も確認している。方向は南側柱列でみると東で14度11分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.16m、柱間は西より1.69m・1.93m・1.84m・1.73mである。南側柱列では総長7.10m、柱間は西より1.71m・1.88m・1.85m・1.67mである。梁行については、東妻で総長5.20m、柱間は北より2.68m・2.52mであり、西妻では総長5.19m、柱間は北より2.53m・2.66mである。柱穴は長辺0.8m、短辺0.7mの長方形を基調とし、柱痕跡は径16cmである。

[SB 5152建物跡] 調査区南端部の地山上で検出した建物跡である。柱穴4個を検出したにとどまったが北にはのびないことを確認しており、南にのびる可能性も少ないと西へのびるものと見て一応東西棟と把えておきたい。本建物は内部にも側柱と同規模の柱穴があるため総柱建物の可能性がある。方向は南側柱列でみると東で10度9分南に偏している。桁行柱間は南側柱列の東から1間分が1.62mであり、梁行柱間は東妻が総長2.55m（2間分）である。柱穴は長辺1.1m、短辺0.7~0.6mの長方形を呈し、柱痕跡は径30cmである。

C. 穴穴住居跡

豊穴住居跡は、調査区中央付近で3軒、北東部で1軒、南東部で3軒検出した。いずれも他の遺構に壊されたり、上部が削平されたりするなど残存状態は必ずしも良好とはいえない。以下では、このうちの1軒で全体の規模や建て替えの変遷がある程度つかめたものを取り

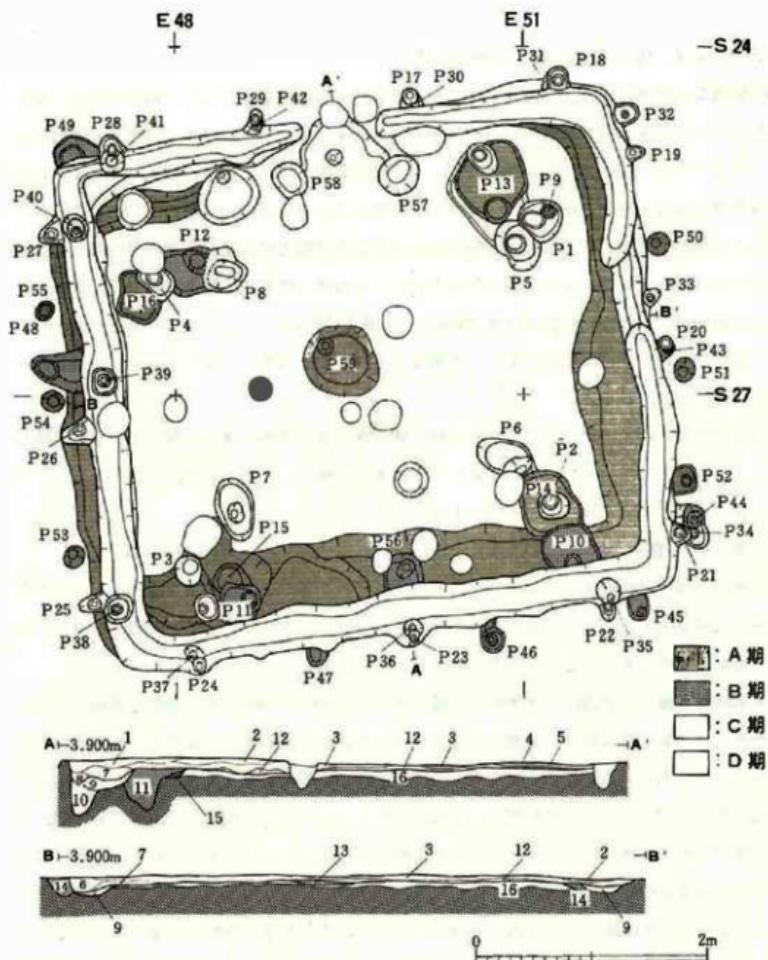
上げて説明する。

[SI 5065住居跡] 調査区中央付近の東寄りに位置する。平面形は東西がやや長い長方形を呈し、方向は西辺でN-7°-Wである。また、同位置で3度の改築があったことが確認できた。これらの規模は、一番新しいD期で東西約4.9m、南北約4.4mを計り、4時期ともほぼ同規模と考えられる。

SI 5065 Aは一番古い時期のものであるため、周溝は北辺と西辺でその一部が確認できたにすぎない。しかし、これにより南北の規模が約4.2mと他の三時期に比べやや小さかったことと、逆に東西がわずかに大きかったか、もしくは西側に若干ずれていたことが確認できた。住居構築の際は掘り方を掘り、地山土を用いて4~8cmの厚さで貼床したものと思われる。周溝は西辺でみると断面形が「U」字形を呈し、深さ約15cmを計る。また、東辺と南辺際には床面より一段低くなった部分が周溝状に巡っているが、これが周溝そのものか、あるいは床を貼った際の工程の段階でできたものかは判断できなかった。カマドは、北辺中央に位置するB期以降のカマド内の貼床下面に、焼土や炭化物が薄く堆積していたことから、全ての時期を通じてこの位置に付設されていたものと思われる。また、床面上の四隅付近ではそれぞれ数個のピットが重複しているが、位置関係からこれらが各時期の主柱穴になるものと考えられる。このうち、位置や切り合い関係からP 13~16がA期のものと推定された。いずれも掘り方は不整形で、明確な柱痕跡は確認できなかった。さらに、壁まわりで検出した6個の小ピット(P 50~55)は、他の三時期がいずれも壁柱穴をもっていることから、これらも同様のものである可能性が強い。

SI 5065 Bは、主柱穴と壁柱穴の存在から確認できた。周溝は、これに続くC・D期と四辺とも重複すると考えられ、この時期のものは確認できなかった。また、先行するA期の上に2~3cmの厚さで貼床されているが、これがB~D期に共通するものか、あるいは細分できるのかどうかまでは観察できなかった。主柱穴(P 9~12)は不整形の掘り方をもち、深さは検出面から30~40cmを計る。柱痕跡が明瞭でなかったため、おもに柱穴の底面が円形にくぼんだ箇所を柱を据えた跡と判断して位置を推定した。また、南辺の中央付近に位置するピット(P 56)も埋土の新旧関係から、この時期に属するものと考えられる。P 43~49は位置関係や埋土の類似点等から、この時期の壁柱穴と考えたが、特に南辺のものなどは先行するA期に属するという可能性も否定できない。

SI 5065 Cは、北辺中央のカマド部分を除いて全周する周溝をもつ。幅25~35cm、深さは床面から10~15cmを計り、断面形は逆台形を呈する。主柱穴(P 5~8)は不整形の掘り方をもち、深さは約40cmを計る。底面では柱を据えた箇所が一段低くなっているが、形がくずれていることから、あるいは柱の抜き取りがあった可能性もある。壁柱穴(P 30~42)は、カマドの



土層観察表

層位	土 色	土 性	留 空	層位	土 色	土 性	留 空
1	灰 黄褐色(10YR 5/6)	シルト	地山土を薄く含む	9	黄 灰色(2.5Y 5/6)	シルト	C期固溝埋土
2	黑 鳥色(10YR 3/6)	*	* をブロック状に含む	10	黑 鳥色(10YR 3/6)	*	ピット59埋土
3	+ (2.5Y 3/6)	*	* を多く含む	11	に bei 黄褐色(10YR 5/6)	*	ピット50埋土
4	に bei 黄褐色(2.5Y 3/6)	*	カマド内埋土 水化物を含む	12	に bei 黄褐色(2.5Y 3/6)	砂質シルト	踏床土
5	黑 色(2.5Y 3/6)	*	* 槽土、灰を多く含む	13	に bei 黄褐色(10YR 5/6)	*	ピット59埋土
6	灰 黄褐色(10YR 5/6)	*	D期固溝埋土	14	に bei 黄褐色(10YR 5/6)	シルト	C期固溝埋土
7	黄 灰色(10YR 5/6)	*	*	15	褐 灰色(10YR 5/6)	シルト	A期埋土
8	灰 黄褐色(10YR 5/6)	*	ピット23埋土	16	に bei 黄褐色(10YR 5/6)	砂質シルト	A期粘土土

第9図 SI 5065住居跡実測図

ある北辺で4個、他の三辺で3個づつ配列されている。

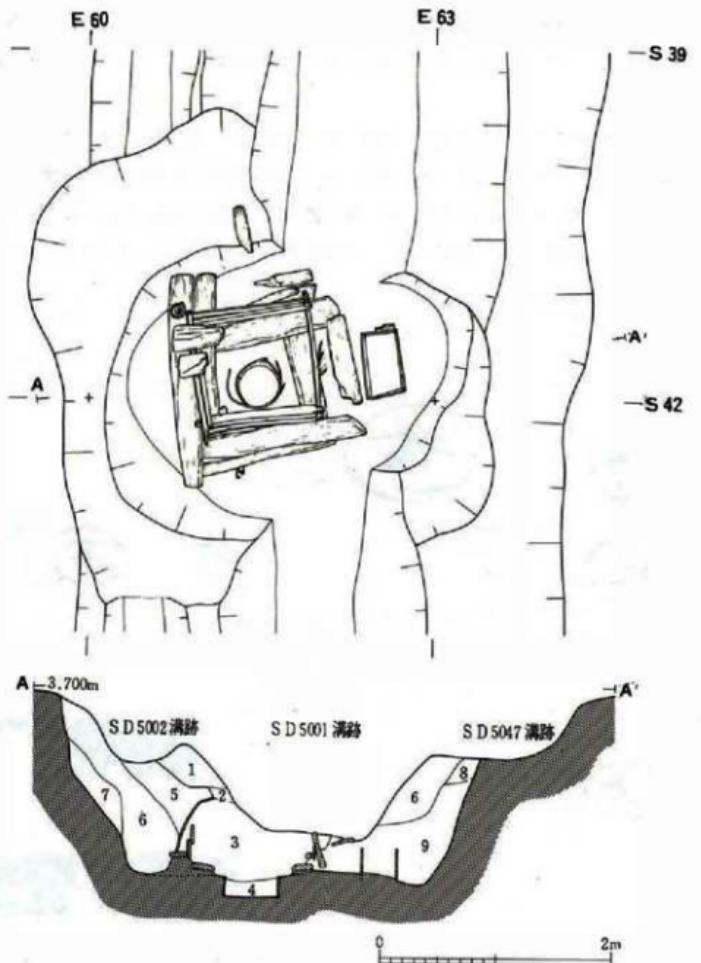
S 15065 D の周溝は、カマド部分と東辺の中央付近で一部途切れている。幅25~45cm、深さは床面から約10cmを計る。断面形はC期と同様逆台形を呈するが、外壁では底面から比較的急な立ち上がりをみせる。カマドは削平が著しく、地山を削り出した側壁の基底部がわずかに残存する程度である。側壁の端部では、カマドに付随すると考えられる2個のピット(P 57・58)が検出された。主柱穴(P 1~4)の掘り方は円形または略方形を呈し、他の三時期のものよりもやや形が整っている。深さは25~40cmを計り、南西隅の柱穴を除く三箇所で径約15cmの円形の柱痕跡が確認できた。柱間隔は東西約3.2m、南北約2.4mである。また、壁柱穴(P 17~29)はB期のものとほぼ同位置にあり、間隔は北辺で1.25~1.35m、他の三辺で1.5~1.7mで規則的に配列されている。

遺物は、住居内埋土中から土師器杯・高杯・甕・頸・須恵器杯・甕、A期貼床中から土師器甕がそれぞれ出土している。いずれも破片で、全体の形態がわかるものは出土していない。なお、土師器は全て非クロロ調整のものである。

D. 井戸跡

井戸跡は、調査区南東部、中央部、北西部でそれぞれ1基づつの計3基を検出した。このうち中央付近検出のS E 5030井戸跡は、これより新しい時期の造構によって大部分が壊されているため詳細は不明である。したがって、ここでは他の2基について説明する。

[S E 5056井戸跡] 調査区の南東隅に位置する。S D 5001・5002・5047溝跡と重複し、これらより古い。構築の際は掘り方を掘り、底面には土台として長方形の厚板材を井桁状に据えている。この上に木組みの井戸側を載せているが、西辺では外側に同様の厚板材をさらに重ねて、井戸側のずれを防いでいる。井戸側は、上部が消失しているため一段のみの確認であるが、長方形の板材の両端に枘と枘穴を設けて正方形に組んだもので、一辺約90cmを計る。また、この下部には水溜用の円形曲物(図版20-5)が埋め込まれている。井戸側の部材は、北辺と南辺のものが両端に舌状の枘をつくり出し、西辺のものにはこれを受ける枘穴が穿たれている。一方、東辺のものは棒状部材の両端の上部に鉤状のつくり出しを設けて、北辺と南辺の部材の枘がこの内側にかみ合わせるだけの簡単なつくりになっている。隅柱はみられず、上部の部材は廃絶時か、あるいは他の造構の構築の際に抜き取られたと考えられる。しかし、西辺で2枚の長方形の板材が残存しており、これが井戸側の外周に沿って縦に並べられていることから、各辺にも同様に板材を巡らす構造であった可能性もある。さらに、東辺の外側のやや離れた位置で、掘り方底面に長方形の木枠が単独で据えてあるのが確認できた。長辺56cm、短辺30cm、厚さ1.2cmで、高さは28cmを計る。蓋板や底板はみられなかった。各辺の板材とも両端に切欠きをいれ枘をつくり出す、いわゆる「目違い枘」で組み合わせている。また、木枠内の埋土より



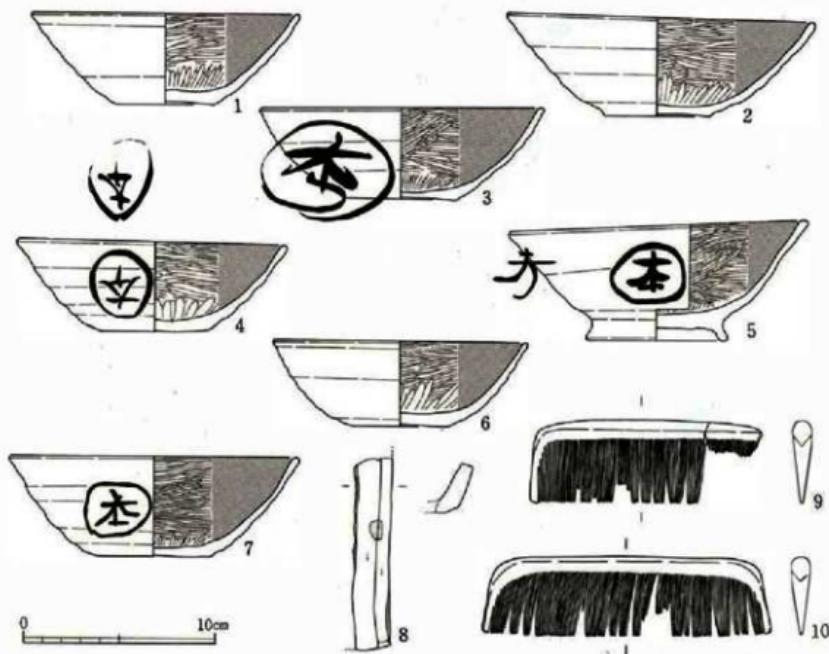
土層観察表

場所	土色	土性	固有考	場所	土色	土性	固有考
1 黒褐色(2.5Y 8)	シルト	井戸跡内埋土、遺物取上1層		6 オリーブ黒色(5Y 8)	シルト	火山灰を若干含む、遺物取上層方2層	
2 オリーブ黒色(5Y 8)	*	*	*	7 緑灰色(7.5G 8)	砂質シルト	掘方埋土	*
3 黒褐色(5Y 8)	粘土質シルト	*	*	8 *	*	*	*
4 *	(*)	シルト	*	9 *	(*)	*	*
5 オリーブ黒色(5Y 8)	シルト	掘方埋土、遺物取上層方1層					

第10図 SE 5056 井戸跡実測図

中央に孔をあけた車輪形の木製円盤（図版7-9）が1点出土している。掘り方の埋土は、地山土などをブロック状に多量に含んだ黒色土及び緑灰色砂質土で、灰白色火山灰が斑状に若干含まれている。

遺物は、井戸埋土中では土師器杯・高杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦、風字硯（第11図8）、横櫛（第11図9・10）、曲物側板等があり、掘り方埋土中からは土師器杯・高杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦、砾石が出土している。これらのうち、土師器はロクロ調整と非ロクロ調整のものが混在している。また、井戸側内の底

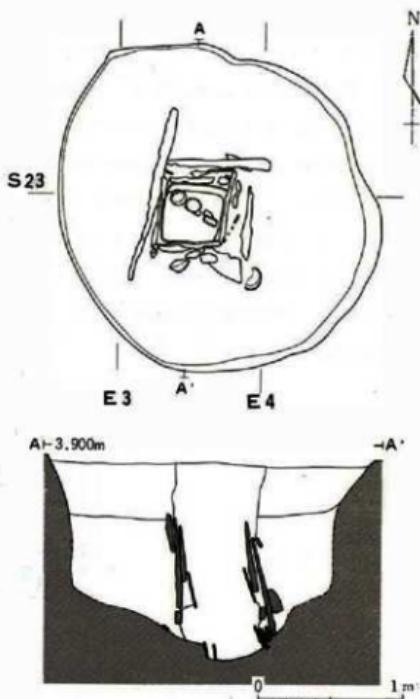


No.	種別	器種	部位	外面測定		内面測定		口径	底径	高さ	留目	回数	備考
				厚	幅	厚	幅						
1	土師器	杯	2層	ロクロナギ、底部切欠き		ハラミガキ、黒色処理		14.0	5.0	4.7	R-318	7-1	
2	+	+	+	+	+	+	+	16.0	5.4	5.1	R-319	7-2	
3	+	+	+	+	+	+	+	14.8	5.8	4.8	R-317	7-3	
4	+	+	3層	+	+	+	+	14.1	5.6	4.7	R-320	6-10	
5	+	高台付杯	+	+	+	+	+	15.5	7.3	5.9	R-321	6-11	
6	+	甕	+	+	+	+	+	13.2	5.0	4.4	R-322	7-4	
7	+	+	甕	+	+	+	+	15.1	6.0	5.2	R-323	7-5	
8	風字硯		1層	ハラケズリ		ハラケズリ					R-416	7-6	
9	横櫛		2層	高さ4.2cm 幅幅1.0cm	現存曲数101本							7-8	
10	。		+	高さ4.1cm 長さ14.9cm	横幅1.0cm	曲数129本						7-7	

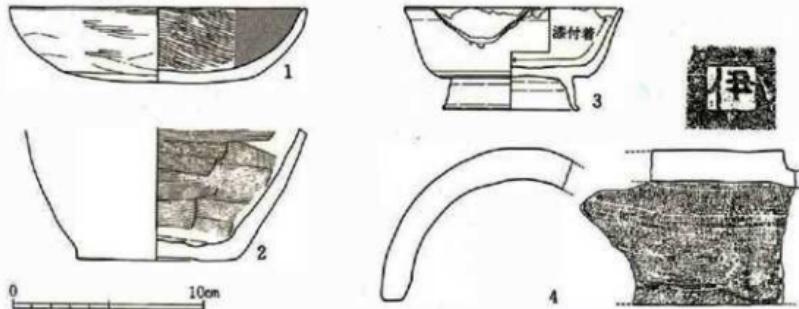
第11図 S E5056井戸跡出土遺物

面付近からほぼ完形の土師器杯・高台付杯6点(第11図1~6)が比較的まとまった状態で出土している。いずれも底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を施さないものである。このうち3点に「国」と「弓」の墨書きがみられる。さらに、掘り方中からも同様の墨書き土器(第11図7)が出土している。

[SE5069井戸跡] 調査区西端部の地山上で検出した井戸跡である。構造的には、方形に組み合わせた板材と曲物による側を備えたものである。即ち、最下段に隅丸方形の曲物、その上に横板を方形に組んだ側、その上に隅丸方形の曲物を積み上げてその四周にそれぞれ縦板1枚を立て並べて最上段の側としている。最下段の曲物の周囲には瓦や須恵器の破片が密接して立ち並んでおり、最下段の曲物の固定と、その上の横板による側の沈



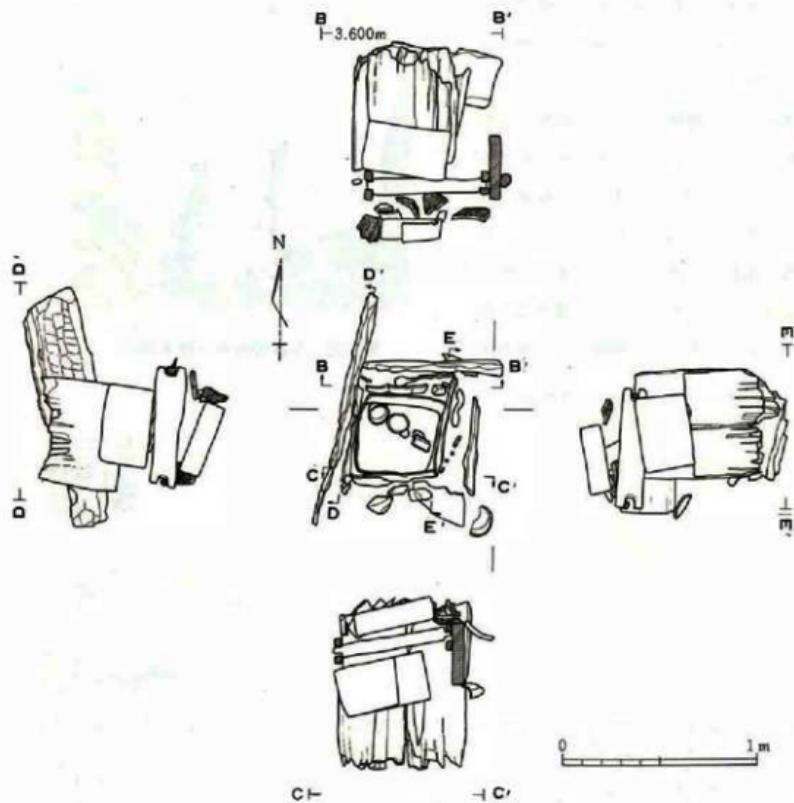
第12図 SE5069井戸跡実測図



分類	目	着位	外観調査	内面調査	口径	底径	高さ	壁厚%	断面%	備考
1 土師器	杯	面方	口縁下部へラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	15.6	5.9	3.9	R-352	7-11	
2	盤	+		ヘラナダ	8.4	8.4		R-353	7-12	
3 須恵器	高台付杯	1層	口縁下部を輪郭線でラミスリ切り	ロクロナダ	11.4	7.1	5.3	R-351	7-13	腹部に未施釉
4 瓦		面方	表面布目	表面布目				B-436	7-14	内面に打ち欠き 片口状に剥離

第13図 SE5069井戸跡出土遺物

下防止を図ったものと考えられる。側の内法は各段によって異なり、最上段が長辺47cm・短辺45cm、2段目が長辺44cm、短辺40cm、3段目が長辺55cm、短辺54cm、最下段が長辺42cm、短边35cmである。掘り方は平面形が円形を呈し、規模は径2.3m、深さ1.4mを計る。遺物は側内埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・高杯・甕、割り抜き箱状の木製品（図版7-15）などが出土している。須恵器高台付杯には内面全体に黒漆の付着したもの（第13図3）が1点出土している。口縁部の一部を打ち欠き注ぎ口としている。掘り方埋土からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、丸瓦・平瓦などが出土している。須恵器や瓦の多くは側の構築に伴うものである。土師器はロクロ調整を行なっていないものであり、瓦はすべて多賀城政庁第Ⅱ期のものである。



第14図 SE 5069井戸側立面図

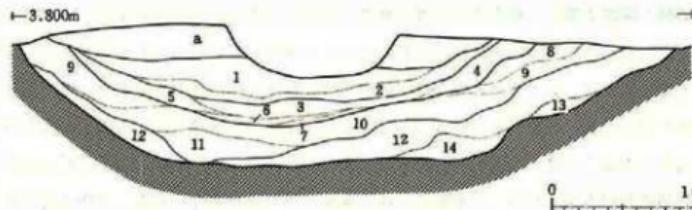
E. 溝跡

溝跡は、調査区内の全域でかなりの数を検出したが、このうちの6条が明確に古代に属するものであった。しかし、この数は今後の整理作業によって若干の増減が生じる可能性がある。また、調査区東側で検出したSD 5050・5110溝跡（出土遺物 第23図2～9）は、以下に説明するSD 180溝跡と同位置で重複し、これより新しい時期のものである。

[SD 180溝跡] 調査区東端付近で検出した南北方向に延びる溝跡である。SD 5050溝跡や掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。この北側での延長は、昨年度調査分のB区や今年度宮城県教育委員会調査分のC区においても検出されている。方向は、本調査区の中央付近から北側では西側への傾きがやや大きくなりN-32°-W、南側ではN-7°-Wである。また、埋土の中程で土層の堆積のしかたや土質の明瞭な違いがみられたことから、大きく2時期の変遷があったと判断した。

SD 180Aは、上幅4.2～4.6m、下端2.1～2.3m、深さ約1mを計り、断面形は逆台形を呈する。埋土は自然堆積土と考えられ、中程が砂質土の薄い土層を含んだ黒褐色粘土質土、その下層が地山ブロックを含んだ暗灰黄色土、最下層が比較的粗い砂を含んだ緑灰色砂質土である。

SD 180Bは、先行するA期より規模が一まわり小さく、上幅2.9～3.4m、下幅0.8～1.2m、深さ約0.7mを計る。断面形は壁が緩やかに立ち上がる舟底形を呈する。埋土は、上層が炭化物や灰を含む黄灰色土、下層がややスクモ化した黒褐色粘土質土の自然堆積土である。



土層観察表

層番	土色	土性	圖考	層番	土色	土性	圖考	
a	黒褐色(10YR 5/2)	シルト	SD 5050埋土	SD 180(A) 埋土	8	黄褐色(2.5Y 5/2)	シルト	遺物取上3層
SD 180(B) 埋土				9	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	*	*	
1	黄褐色(2.5Y 5/2)	シルト	遺物取上1層	10	黒褐色(2.5Y 5/2)	粘土質シルト	*	
2	灰褐色(5Y 5/2)	*	*	11	*	*	*	
3	黒褐色(10Y R 5/2)	粘土質シルト	遺物取上2層	12	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	シルト	遺物取上4層	
4	*	シルト	砂質シルト	13	にふい黄色(2.5Y 5/2)	砂質シルト	*	
5	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	砂質シルト	*	14	綠灰黄色(7.5Y 5/2)	*	グライ化	
6	灰褐色(5Y 5/2)	粘土質シルト	*					
7	黒褐色(10Y R 5/2)	*	*					

第15図 SD 180溝跡セクション図

遺物は、A期埋土中から土師器杯・高杯・鉢・甕（第20図1～9、第21図1～5）、須恵器杯・高杯・甕（第21図6）・瓶・甕（第20図10）が出土している。出土量は土師器の占める割合が圧倒的に多い。このほか、曲物蓋板・底板、横刃の柄、木製鍾、両側面に鋸歯を刻んだ串状木製品、馬骨等（図版19）が出土している。

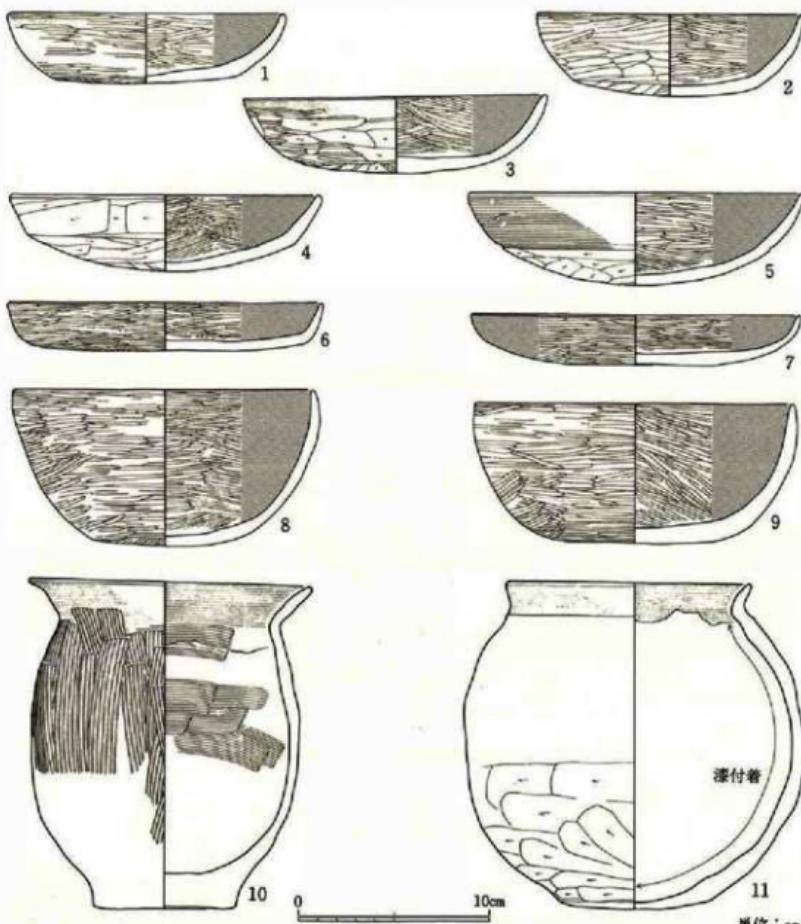
B期埋土中からは、土師器杯・高杯・蓋・盤・甕（第16・18図、第19図1～3）、須恵器杯・高台付杯・高杯・蓋・甕・瓶（第17図、第19図4～9）が出土しており、この中には内面に漆が付着しているものもある。さらに平瓦・丸瓦のほか、木簡、漆紙文書（註）や黒漆塗りの木製皿、鏡の柄、曲物蓋、笊、箕、田下駄、丸木弓、木製鍾、椿皮等（図版19・20）が出土している。なお、土師器についてはA・B両期とも全て非ロクロ調整のものである。

（註）木簡、漆紙文書については現在解説作業中である。内容が判明し次第別途報告する予定である。

F. 土 坡

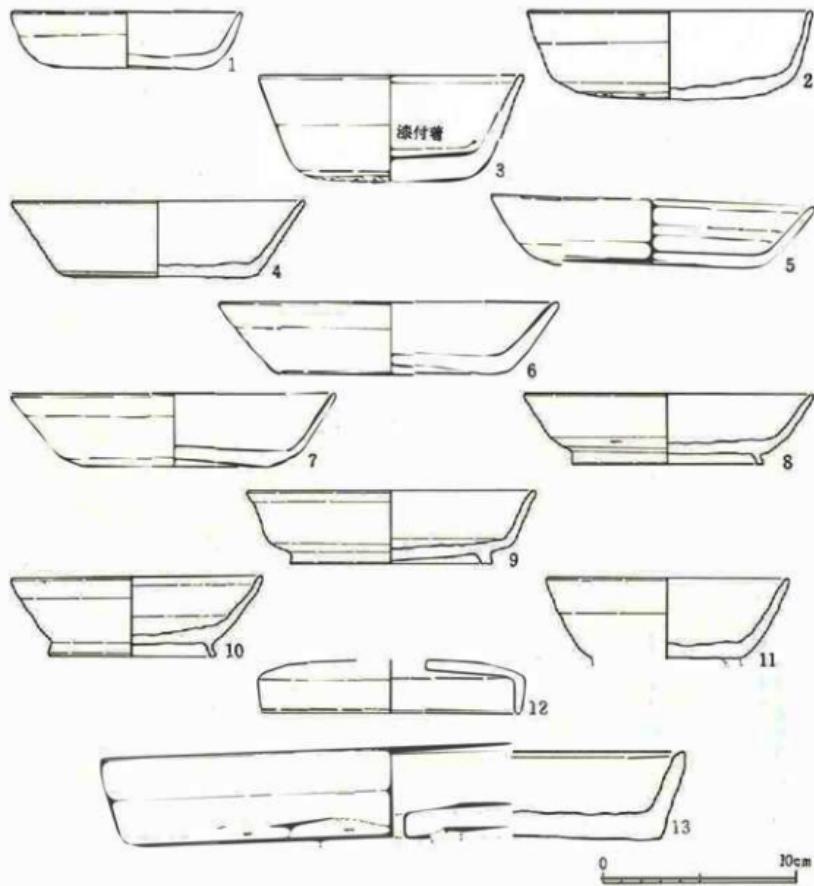
〔SK5099土坡〕 調査区西端部の地山上で検出した土坡である。SK5151など多くの遺構と重複しており、それらのものより古い。南北9.2m、東西1.8～1.6m、深さ0.9～0.35mを計る。底面や壁面に凹凸があり、複数の土坡が連続して掘り込まれたような状況を呈している。底面では地山中に埋没していた樹木を切り取った跡が認められ、その周辺から樹木の細片が大量に出土している。遺物は木製の下駄が1点出土している。左側面が若干破損している他は遺存状態が良く、鼻緒も残存していた（第25図）。

〔SK5086・5092土坡〕 調査区西半部で検出した土坡である。いずれも地山上で検出しているが、SK5092については第Ⅲ層におおわれることを確認している。これらの土坡は平面形が不整形を呈しており、いずれも底面に横倒しの状態で樹木が検出されたことや、埋土が一度に埋め戻されたような状況を呈していることなどから、地山中に埋没していた樹木を抜き取るために掘削し、中途で断念して埋め戻したものと考えられる。SD5029によって分断されているが、位置関係や樹木のあり方から本来は一連の遺構であったと考えられる。遺物は両土坡から土師器杯・甕、須恵器杯・双耳杯・長頸瓶・甕など（第22図）が多数出土している。土師器杯はロクロ調整を行なっているもので、その後体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施したものや再調整を施していないものなどがある。また、SK5092からは円面鏡（第22図10）と風字鏡（第22図11）が出土しており、前者は破片がほとんど接合してほぼ完全な形に復元することができた。



No.	種別	器種	部位	外面調整		内面調整		口径	底径	高さ	算出No.	回数No.	備考
				目録	記号	目録	記号						
1	土師器	杯	1番	口縁	ヨコナタマツコヘラミガキ	ヘラミガキ・茶色處理	14.6	9.7	3.7	R-65	8-1		
2	*	*	*	口縁	ヨコナタマツコヘラミガキ	*	*	13.8	9.5	4.3	R-46	8-2	
3	*	*	*	口縁	ヨコナタマツコヘラミガキ	*	*	15.9		4.0	R-64	8-3	
4	*	*	*	口縁一部	ヘラミガキ	*	*	16.3		4.0	R-63	8-4	
5	*	*	*	口縁一部	ヘラミガキ	*	*	17.5		4.8	R-195	8-5	
6	*	盤	*	口縁一部	ヘラミガキ	*	*	16.5	14.2	2.5	R-61	8-6	
7	*	*	*	口縁一部	ヘラミガキ・黒色處理	*	*	17.1	7.6	2.6	R-62	8-7	
8	*	杯	*	口縁一部	ヨコナタマツコヘラミガキ	*	*	16.1	8.0	8.1	R-69	8-8	
9	*	*	*	*	*	*	*	16.5		7.3	R-68	8-9	
10	*	甌	*	口縁	ヨコナタマツコヘラミガキ	ヨコナタマツコヘラミガキ	14.9	7.4	16.9	R-129	8-11	底部に木漆痕	
11	*	*	*	口縁	ヨコナタマツコヘラミガキ	ヨコナタマツコヘラミガキ	12.2	7.9	17.0	R-130	8-12	内面に漆付着	

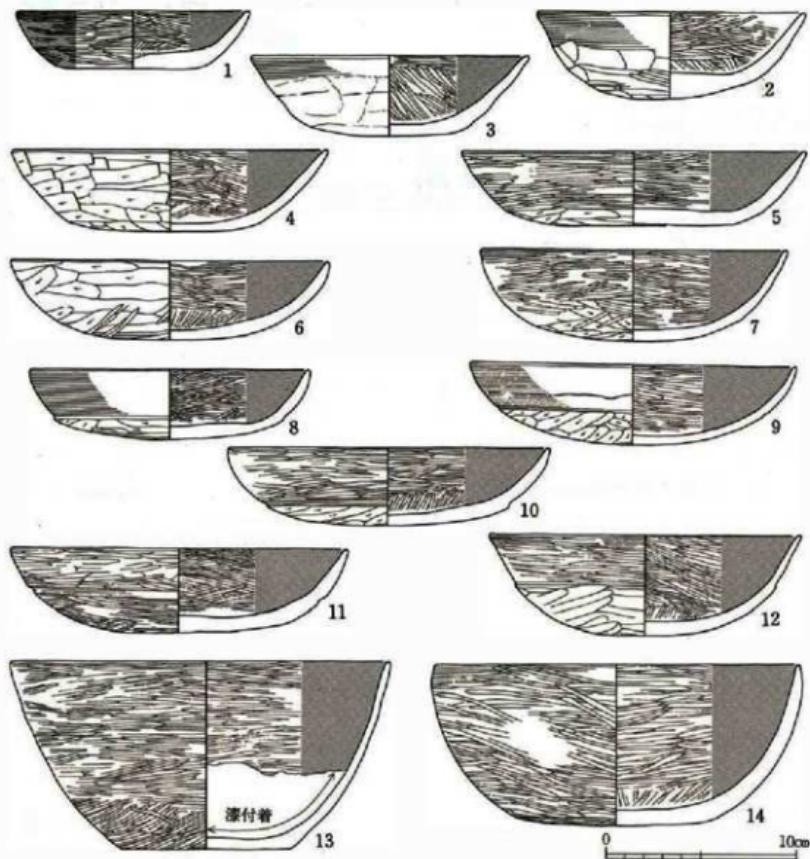
第16図 SD180B溝跡出土遺物(1)



単位: cm () は推定値

種別	形	部位	外面調整		内面調整	口径	底径	高さ	容積	回数	備考
			左	右							
1 須恵器	杯	1号	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		ロクロナギ	12.0	6.9	3.0	R-116	9-1	
2	+	+	+		+	14.8	9.8	4.6	R-113	9-2	
3	+	+	+		+	(13.6)	8.7	5.6	R-111	9-3	内面: 漆付着
4	+	+	ロクロナギ 底鉢凹部へ切り一回鉢へラケズリ		+	15.3	9.3	4.0	R-115	9-4	
5	+	+	+		+	16.8	9.7	3.5	R-106	9-5	
6	+	+	ロクロナギ 底鉢凹部へ切り一回鉢へラケズリ		+	17.7	12.2	3.8	R-108	9-6	
7	+	+	ロクロナギ 底鉢凹部へ切り一回鉢へラケズリ		+	17.0	9.5	3.8	R-109	9-7	
8	+	高台付杯	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		+	15.0	9.0	3.7	R-110	9-8	
9	+	+	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		+	15.0	10.4	3.8	R-114	9-9	
10	+	+	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		+	13.1	8.7	4.1	R-117	9-10	
11	+	+	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		+	(12.6)			R-112	9-11	
12		蓋	ロクロナギ 底鉢へラケズリ		+	(13.4)			R-118	9-12	
13	+	高杯	ロクロナギ 底へ底鉢へラケズリ		+	(30.3)				9-13	杯部内面焼毛

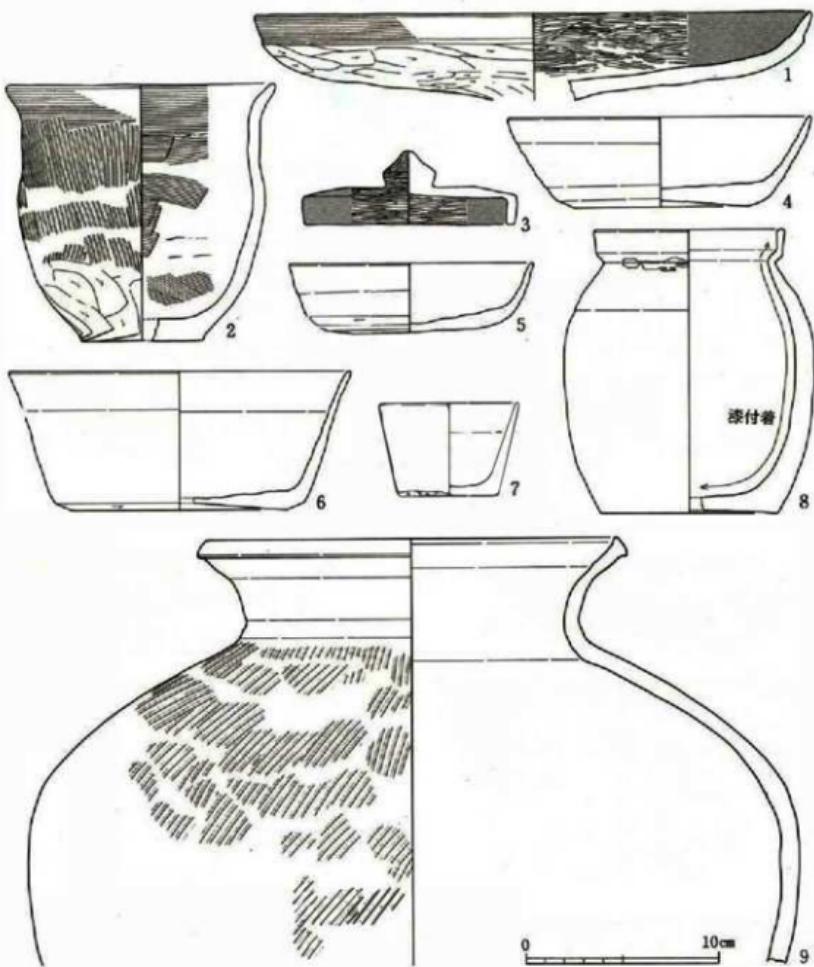
第17図 SD180B溝跡出土遺物(2)



単位: cm () は推定値

No	種別	名種	部位	外表面調整	内面調整	口径	底径	高さ	壁厚	底径	備考
1	土師器	杯	2層	ハラミガキ・黒色処理	ハラミガキ・黒色処理	12.3	5.5	3.1	R-154	10-1	
2	*	*	*	口縁～底部へラミガキ	*	14.1		4.6	R-143	10-2	
3	*	*	*	口縁～底部コナダ	*	14.6	8.4	4.3	R-155	10-3	
4	*	*	*	口縁～底部 ハラケズリ	*	16.6	10.1	4.3	R-150	10-4	
5	*	*	*	口縁～底部 ハラミガキ	*	15.0		3.9	R-154	10-5	
6	*	*	*	口縁～底部へラケズリ→ハラミガキ	*	16.0		4.2	R-149	10-6	
7	*	*	*	口縁～底部コナダ	*	16.1		4.8	R-152	10-7	
8	*	*	*	口縁～底部コナダ	*	14.8		3.7	R-151	10-8	
9	*	*	*	*	*	17.1		4.2	R-148	10-9	
10	*	*	*	口縁～底部コナダ→ハラミガキ	*	16.9		4.1	R-157	10-10	
11	*	*	*	口縁～底部コナダ→ハラミガキ	*	17.8		4.4	R-144	10-11	
12	*	*	*	底部 ハラケズリ→ハラミガキ	*	16.4		5.2	R-153	10-12	
13	*	*	*	口縁～底部 ハラミガキ	*	(30.0)	8.8	9.9	R-146	10-14	内面に漆付着
14	*	*	*	口縁 ロコケテヘラミガキ 底部 ハラケズリ→ハラミガキ	*	(19.2)	(10.6)	8.4	R-145	10-15	

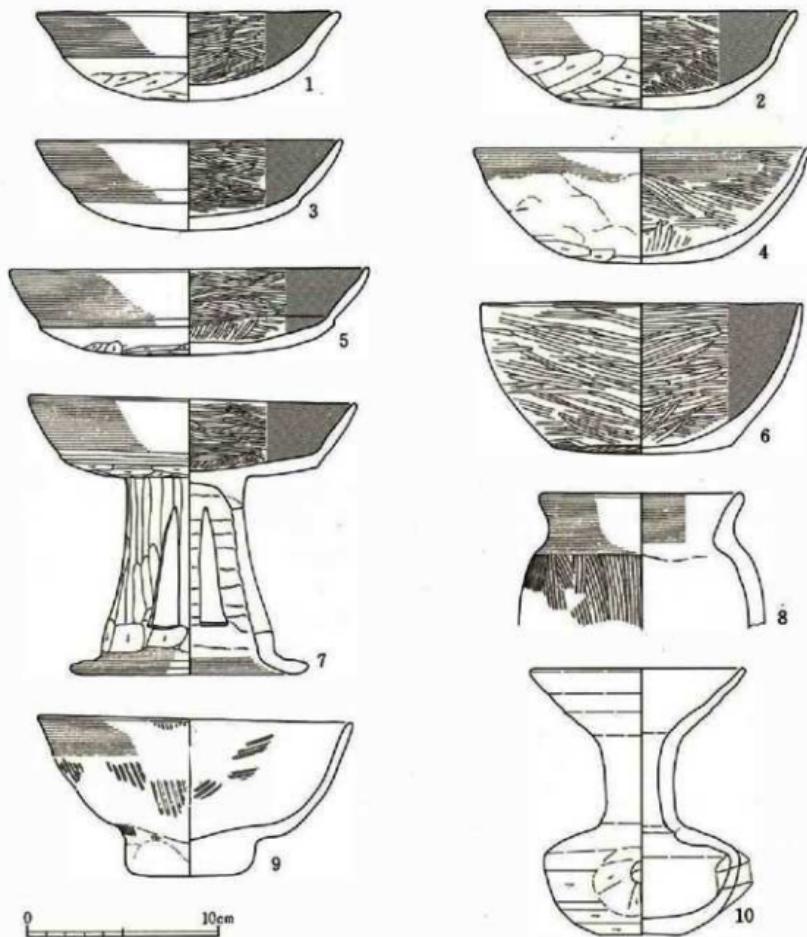
第18図 SD 180B 溝跡出土遺物(3)



単位: cm () は推定値

No.	種別	器種	層位	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	世紀	回数	備考
1	土器	高杯	2層	口縁 ロコナダリ 口縁 ハラミガキ 口縁 ハラミガキヘタケズリ	ハラミガキ・黑色処理	(28.8)	(6.3)	13.3	R-147	11-1	
2	+	甕	+	口縁 ロコナダリ 口縁 ハラミガキヘタケズリ	ハラミガキ	(14.0)	(6.3)	13.3	R-180	11-2	
3	+	甕	+	ロクロナダリ	ハラミガキ・黑色処理	(10.8)		3.8	R-150	11-3	
4	須恵器	杯	+	ロクロナダリ ロクロナダリヘタヘタヘナダ	ロクロナダ	15.7	9.1	4.7	R-176	11-8	
5	+	甕	+	ロクロナダリ ロクロナダリヘタヘタヘタケズリ	*	12.6	8.5	3.6	R-175	11-7	
6	+	甕	+	ロクロナダリ ロクロナダリヘタケズリ	*	(17.8)	(11.3)	7.2	R-177	11-9	
7	+	甕	+	ロクロナダリ ロクロナダリヘタヘタヘタケズリ	*	(7.3)	5.2	4.8	R-174	11-10	
8	+	甕	+	ロクロナダリ	*	(9.9)	9.2	14.7	R-188		内面と外面頸部に添付着
9	+	甕	+	ロクロナダリ 外縁 半平行帯	ロクロナダ・ナダ	22.2			R-221	11-11	

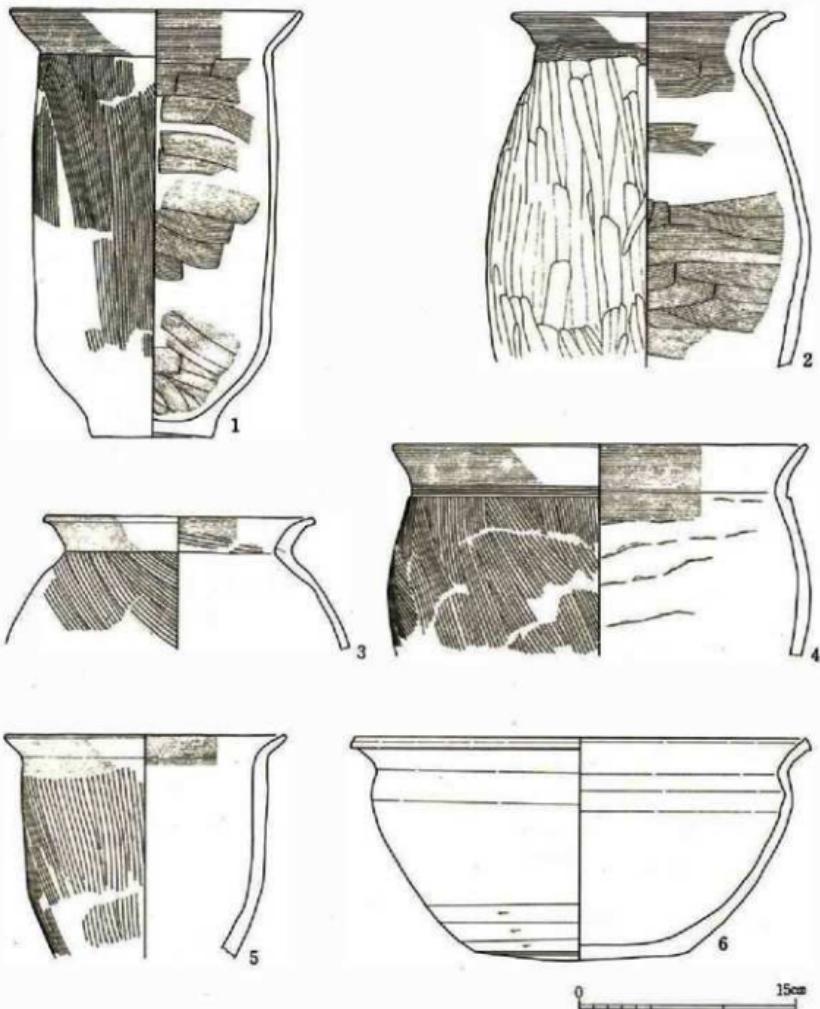
第19図 SD180B 溝跡出土遺物(4)



単位: cm () は概定値

No.	種別	器種	厚さ	外面 装飾	内面 装飾	口径	底径	高さ	壁厚	底厚	固形%	備考
1	土器器	杯	3層	口縁 ヘラミガキ 口縁 ヘラミガキ 口縁 ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	(15.8)	4.6	R-195	12-1			
2	*	*	*	口縁一全体 ヘラミガキ	*	16.1	8.0	5.1	R-192	12-2		
3	*	*	*	口縁一全体 ヨコナデ	*	16.0	4.7	R-193	12-3			
4	*	*	*	口縁 ヘラミガキ 口縁一全体 ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラミガキ	17.5	6.0	R-197	12-4			
5	*	*	*	口縁 ヘラミガキ 口縁一全体 ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	18.7	4.5	R-196	12-5			
6	*	*	*	口一底部 ヘラミガキ 口縁 ヘラミガキ	*	(16.7)	9.3	7.8	R-194	12-6		
7	*	高杯	*	口縁 ヘラミガキ 口縁 ヘラミガキ	*	17.1	14.2	R-208	12-7			
8	*	甕	*	口縁 ヨコナデ 底部 ハナメ	口縁 ヨコナデ	10.7		R-210	12-9			
9	*	鉢	4層	ハナメ ハナメ	ハケメ	16.4	6.6	8.2	R-222	12-8		
10	須恵器	鉢	3層	口縁 ヘラミガキ 底部 ハナメ	リクロナデ	11.2	4.3	13.7	R-219	12-11		底部に木葉痕

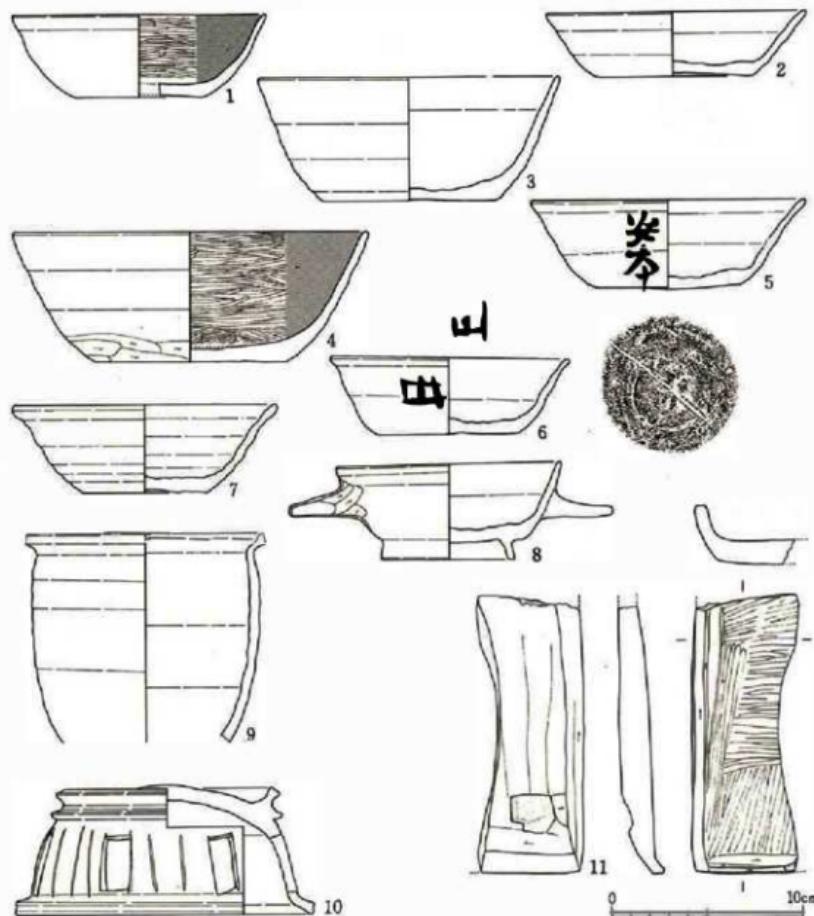
第20図 SD 180A 溝跡出土遺物(1)



単位: cm ()は推定値

No.	種別	器種	層位	外面測定	内部測定	口径	底径	高さ	茎幅	圓幅	備考
1	土師器	壺	3層	横口ヨコナデ 横縫 ヘラナデ	横縫 ヘラナデ	(20.4)	8.4	(29.5)	R-212	13-4	芯部に木基底
2	+	+	+	口縫 ヨコナデ	-	19.0	-	-	R-211	13-2	
3	*	+	+	横縫 ヘラナデ	口縫 ヨコナデ→ハケヌ	18.8	-	-	R-209	13-2	
4	+	+	+	横縫 ヘラナデ	口縫 ヨコナデ	(28.8)	-	-	R-213	13-3	
5	+	+	4層	-	-	(19.5)	-	-	R-226	12-10	
6	須恵器	-	3層	ヨウロヨウル ヨウロヨウルヘタメリ	ヨウロナデ	32.0	14.7	15.5	R-220	13-5	

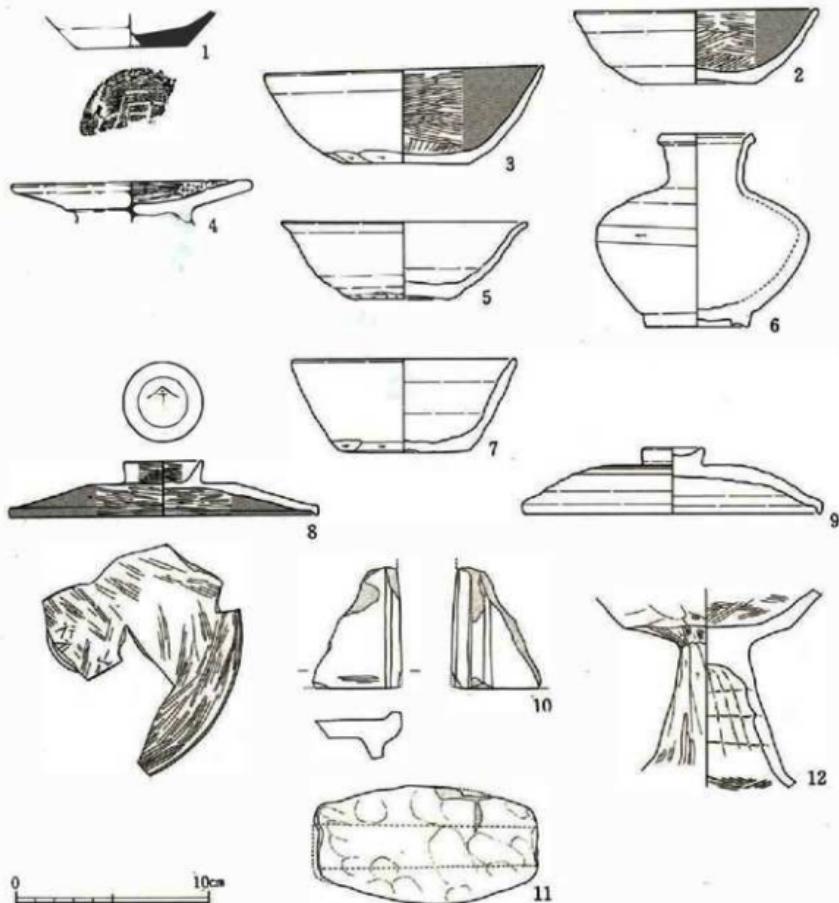
第21図 SD180A溝跡出土遺物(2)



単位:cm ()は推定値

品種	形	施	遺物番号	外面調査	内面調査	口径	底径	器高	壁厚	底輪%	因縫%	備考
1 土師器	杯	+	SK 5086	口クロナデ 口部手付ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)	(6.8)	4.3	R-355	14-1		
2 塗瓦器	*	+		ロクロナデ	(13.6)	8.6	3.4	R-356	14-3			
3 *	*	+		*	(15.8)	9.0	7.4	R-357	14-2			
4 土師器	*	+	SK 5092	口部手付ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(18.6)	10.0	6.8	R-365	14-4		
5 塗瓦器	*	+		ロクロナデ	14.3	7.6	4.7	R-372	14-9		表面に墨跡	
6 *	*	+		*	12.6	7.5	4.0	R-371	14-8		全体2箇所に墨跡	
7 *	*	+		*	(13.9)	(6.5)	4.6	R-373	14-5		底部に墨跡	
8 *	双耳杯	+		ロクロナデ	*	11.8	7.0	5.0	R-361	14-7		
9 土師器	*	+		*	*	12.6		R-370	14-5			
10 内面鏡	*	+		*	11.7	15.6	6.8	R-382	14-10		表面と裏面に迷い	
11 銀字鏡	*	+		ヘラケズリ	ヘラミガキ			R-383	14-11		平行線文字で表す	

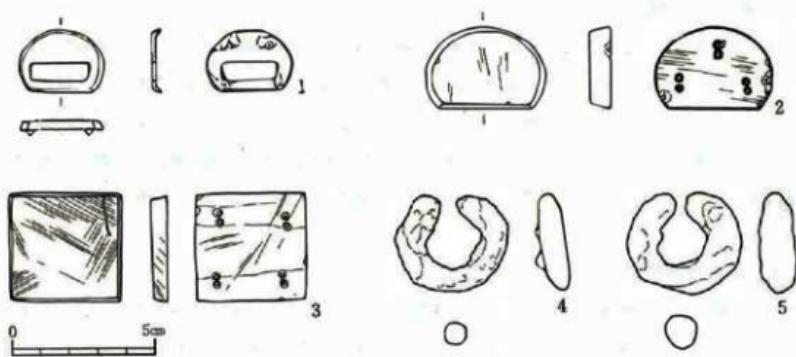
第22図 SK 5086・5092土塙出土遺物



単位: cm ()は推定値

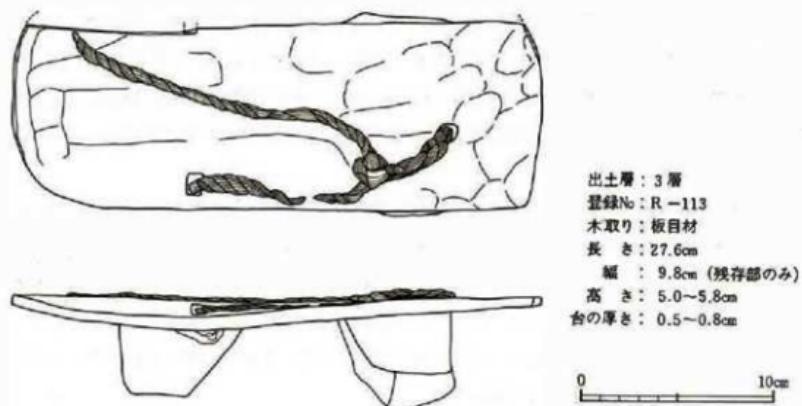
No.	種別	器種	通横幅	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	登録No.	目盛No.	圖考
1	須恵器	杯	5 D 500	品ヨロナデ 品ヨロナデ 面削み切り	ロクロナデ	(4.6)	5.9	3.8	R-402	15-1	底部にヘラ痕
2	土師器	+	5 D 510	+	ヘラミガキ・黒色処理	12.6	5.9	3.8	R-391	15-3	
3	+	+	+	ロクロナデ	+	14.3	6.4	4.8	R-392	15-2	
4	高台付皿	+	+	ロクロナデ 面削み切り	+	12.4			R-390	15-4	
5	須恵器	杯	+	品ヨロナデ 品ヨロナデ 面削み切り	ロクロナデ	12.6	4.9	4.0	R-393	15-5	
6	+	蓋	+	ロクロナデ 品ヨロナデ 面削み切り	*	5.0	5.3	9.9	R-394	15-6	
7	+	杯	5 D 400	ロクロナデ 品ヨロナデ 面削み切り	*	(11.5)	6.7	4.8	R-280	15-9	両部に自然縫
8	土師器	蓋	1 D 400	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	(16.0)		2.8	R-278	15-7	内外面3箇所にヘラ痕
9	須恵器	+	+	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.2)		3.4	R-381	15-8	
10	陶字鏡	I 手	+	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理				R-425	15-13	土師質
11	土 瓶	高 杯	Nb 壺	ハケメー・ヘラカゲリ・ヘラミガキ	ハケメー・ヘラミガキ				R-426	15-14	
12	土師器	高 杯	Nb 壺	ハケメー・ヘラカゲリ・ヘラミガキ	ハケメー・ヘラミガキ					17-1	

第23図 その他の遺構・堆積土出土遺物(1)



No.	種別	遺構番号	登録No.	因縁No.	圖	考	No.	種別	遺構番号	登録No.	因縁No.	圖	考	
1	丸瓶	1	K-5099	17-13	斜線	鉄製	4	耳環	2	K-5099	17-11	○		
2	*	2	D-5022	R-433	17-14	石製	5	*	I	場	17-12	○		
3	器方	1		R-434	17-15	*								

第24図 その他の遺構・堆積土出土遺物(2)



第25図 SK 5099土塙出土下駄

3. 中世

中世の遺構としては昨年度の調査で発見した屋敷跡の東半部を検出し、更にその東側でそれより古い別の屋敷跡を発見した。前者を新しい屋敷跡、後者を古い屋敷跡と仮称する。層位に見ると、新しい屋敷跡は第Ⅲ層上面で検出することができ、古い屋敷跡は第Ⅲ層におおわれるなどを確認している。いずれも周囲に溝をめぐらしており、その内側で検出した掘立柱建物跡10棟、柱列跡2条、井戸跡11基、溝跡14条、土塙基2基、土塙7基などは屋敷を構成する遺構と考えられる。

A. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟確認した。しかし、建物としてまとまらない柱穴が多数あることから実際はもっと多くの建物が存在したと考えられる。10棟の内、整地層上面で検出したものが3棟、第Ⅲ層上面で検出したものが1棟ある。他の6棟は地山上で検出しており、整地層や第Ⅲ層など堆積層との関係は把握できなかったものである。以下、新しい屋敷跡に伴うと見られる前二者について説明する。

〔SB5164建物跡〕 整地層上で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。方向は北側柱列でみると東で2度10分北に偏しており、南側柱列でみると東で2度23分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長6.31m、柱間は西より約2.0m、約2.0m、2.28mであり、南側柱列で総長5.99m、柱間は西より1.96m、1.88m、2.14mである。梁行については、東妻で3.90m、西妻で3.56mである。柱穴は径40~30cmの円形、或は長径40cm、短径30cmの楕円形を呈しており、埋土は墨褐色土或は灰黄褐色土で地山ブロックを含んでいる。柱痕跡は径15~10cmである。

〔SB5165建物跡〕 整地層上で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。方向は南側柱列でみると東で2度5分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長約6.6m、柱間は西より約2.0m、3.25m、約2.2mであり、南側柱列で総長約6.8m、柱間は西より1.96m、2.70m、約2.1mである。梁行については、東妻で約4.1m、西妻で約4.2mである。柱穴は径35cmの円形、或は長径45cm、短径35cmの楕円形を呈しており、埋土は地山ブロックを含んだ黒褐色土である。柱痕跡は径15cmである。

〔SB5167建物跡〕 整地層上で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。南東隅の柱穴は他の柱穴で破壊されており検出できなかった。北側柱列でみると、東で1度35分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長5.42m、柱間は西より2.30m、3.13m、南側柱列で西より1間分が2.23mである。柱穴は径40cmの円形を呈しており、埋土は地山小粒を含んだ黒褐色土である。柱痕跡は径15cmである。なお、南側柱列において、西より1間目の柱穴の東側約1.6mの地点で上面が平坦な石を検出した。南側柱列の柱筋上にあり、西より1

間目の柱穴と南東隅の柱穴とのほぼ中間に位置することから本建物に係るものと考えておきたい。この石は長さ23cm、幅12cmを計り、不整形を呈している。据え方等は確認できなかった。遺物は、北西隅の柱穴の柱痕跡より鉄製の毛抜きが1点出土している（第25図）。

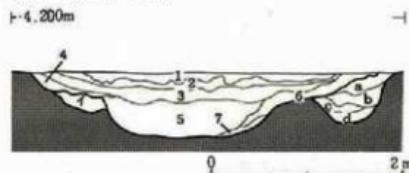
[SB 5166建物跡] 第Ⅲ層上で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。北側柱列の東から1間目の柱穴は検出できなかった。方向は北側柱列でみると東で9度33分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.83m、柱間は西より2.63m、5.20m（2間分）であり、南側柱列で総長約7.7m、柱間は西より約2.6m、約2.6m、約2.5mである。梁行については、東妻で約3.8m、西妻で約3.7mである。柱穴は径45~25cmの円形、或は長径60cm、短径45cmの橢円形を呈している。柱痕跡は径10cmである。

日 溝 跡

中世に属する溝跡は14条発見した。大部分が屋敷地の区画を成しているものである。

[SD 5001・5002・5047溝跡] 古い屋敷跡の東辺を成す溝跡である。調査区東端部の地山上で検出した。これらはほぼ同位置で重複し、SD 5001溝跡が最も新しい。SD 5002溝跡とSD 5047溝跡の新旧関係は不明である。これらは南北に走り、北端部は屋敷跡の北辺を成すSD 150東西溝跡と合流している。SB 5175・5177建物跡、SD 180・5024溝跡などと重複しており、すべてのものより新しい。最も新しいSD 5001溝跡でみると上幅3.3m、深さ0.7mを計り、断面形は段掘り状を呈している。埋土は自然に堆積した様相を呈している。遺物は古代の土師器、

SD 5001・5002・5047溝跡（調査区南側）



土層観察表

層位	土色	土性	層考	層位	土色	土性	層考
SD 5001							
1	灰黒褐色(20YR 4/6)	粘土質シルト	にない黄褐色土を含む	a	褐 黄 色(10YR 5/4)	粘土質シルト	黒褐色土との互層
2	黒褐色(2.5YK 4/2)	*		b	にない黃色(2.5YK 4/2)	砂 質シルト	褐褐色砂質土を含む
3	褐灰色(10YR 4/6)	*	灰黒褐色ブロックを含む	c	褐 黄 色(10YR 5/4)	粘土質シルト	黒褐色粘土質土を若干含む
4	黒褐色(2.5YK 4/2)	*	*	d	にない黃色(2.5YK 4/2)	*	*
5	*	(10YR 4/2)		SD 5002			
6	*	*		SD 5047			
7	褐色(2.5YK 4/2)	粘 土	にない黄褐色土を多量に含む 暗灰色砂を混入	i	褐 黄 色(2.5YK 4/2)	粘土質シルト	褐灰色・黑色粘土質土を含む

第27図 SD 5001・5002・5047溝跡セクション図



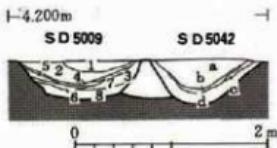
種別：毛抜き
通構：S B 5167
(ピット96)
出土原：柱痕跡内
図版No：17-8

第26図 出土遺物

須恵器が多く出土しており、中世のものとしては無軸陶器甕の体部破片が1点出土しているにすぎない。またSD5002溝跡は上幅0.9m以上、深さ0.4mを計りSD5001溝跡と比較すると小規模である。遺物は古代の土師器や須恵器が出土している。

[SD5009溝跡] 古い屋敷跡の西辺を成す溝跡である。調査区西半部の地山上で検出した。南北に走り、北端部はSD150溝跡の西端部と合流している。南端部はSK5037土塙によって破壊されているため約9mにわたって検出したにすぎない。上幅1.3m、深さ0.4mを計る。埋土は自然に堆積した様相を呈している。遺物は舟形木製品などが出土している(図版19-4)。

SD5009:古い屋敷跡西辺溝
SD5042:新しい屋敷跡東辺溝



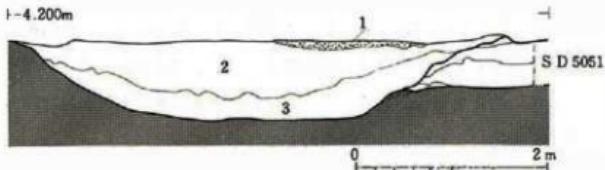
層位	土色	土性	備考
SD5009			
1	黒灰褐色(2.5Y5/1)	シルト	黒褐色土を混入
2	黒褐色(2.5Y3/1)	*	暗黒褐色土ブロックを含む
3	暗灰褐色(2.5Y5/2)	砂質シルト	
4	黄灰褐色(2.5Y5/5)	粘土質シルト	
5	暗灰褐色(2.5Y5/5)	砂質シルト	黒褐色土を斑状に含む
6	黄褐色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	植物遺体を若干含む
7	黄褐色(2.5Y5/5)	シルト	黄褐色砂質土を含む
8	黄褐色(2.5Y5/5)	砂質シルト	暗黒褐色砂質土を含む
SD5042			
a	暗灰褐色(2.5Y5/5)	シルト	暗黒褐色土を混入
b	黒褐色(10YR8/3)	粘土質シルト	植物遺体を含む
c	暗褐色(10YR8/3)	シルト	
d	黄褐色(2.5Y5/5)	*	褐色の粘土を混入

第28図 SD5009・5042溝跡セクション図

[SD5130溝跡] 古い屋敷跡の西辺を成す溝跡である。第Ⅲ層におおわれ、地山上から掘りこんでいる。SD5039溝跡によって大きく破壊されているため南北5.2mにわたって検出したにとどまった。南端はS38ライン付近で立ち上がっている。規模は上幅1.0m以上、深さ0.7mを計る。SD5009溝跡とは埋土の状況が類似し、本来一連の溝跡であった可能性が大きい。

[SD5029溝跡] 新しい屋敷跡の東辺を成す溝跡である。調査区西半部の第Ⅲ層上から掘り込んでいる。南北に走り、北端部は屋敷跡の北辺を成すSD27東西溝跡の東端部に合流している。ほぼ同位置で2時期の重複を確認しているが、古段階(A期)のものについては大部分が新段階(B期)のものによって破壊されているため詳細については不明である。B期のものについてみると規模は上幅5.2~4.0m、深さ0.8~0.6mを計る。底面は、北端部付近がやや低くなっているがほぼ平坦である。埋土の堆積状況は、S27ラインでみると上層(1~4)と下層(5~6)とで明瞭に異なる。下層はグライ化した粘質土と砂質土が自然堆積した様相を見せていているのに対し、上層は地山ブロックを大量に含んだ土で一度に埋め戻されている。この上層に堆積している土は、本溝跡の縁辺部にも分布しており、その上面で建物跡や柱穴群を検出していることから整地層と考えられる。遺物は古代の土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁などとともに青磁碗、無軸陶器甕、擂鉢が出土している。無軸陶器甕は口縁部破片が1点、体部破片が21点出土している。口縁部破片は頸部が直立し、口縁端部が短かく外反する形態を有し

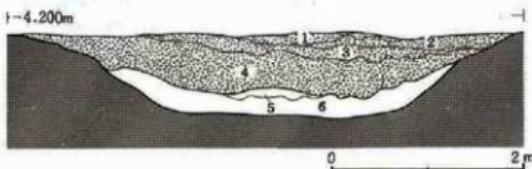
① 調査区南側



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 5/2)	シルト		3	黒褐色(10YR 5/2)	粘土	オリーブ褐色砂を多量に含む
2	* (10Y R 5/2)	*	炭化物、鐵土粒を含む				

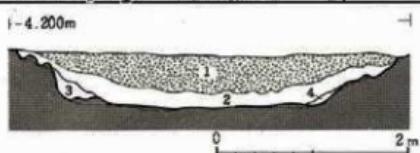
② 調査区中央付近
(S 27ライン)



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10Y R 5/2)	シルト	やぶい黃褐色土を多量に含む	4	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	砂質シルト	黒褐色粘土を含む
2	黒褐色(10Y R 5/2)	*	*	5	黑褐色(2.5Y 5/2)	*	粘土質、鉄ブロックを含む
3	灰黄褐色(10Y R 5/2)	粘土質シルト	粘土ブロックを多量に含む	6	オリーブ褐色(5Y 5/2)	粘土	

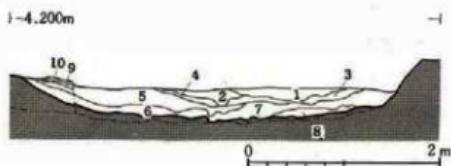
③ 調査区中央付近



土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10Y R 5/2)	シルト	地山土、炭化物を含む	3	灰黄褐色(10Y R 5/2)	粘土	黄褐色砂の混入層
2	黒褐色(2.5Y 5/2)	粘土	* 砂を含む	4	* (*)	*	*

④ 調査区北側

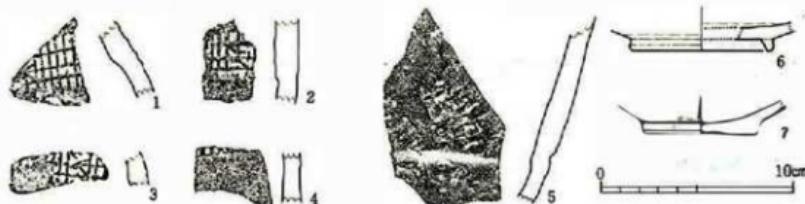


土層観察表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 5/2)	粘土	炭化物、鐵土粒を含む	6	黒褐色(10YR 5/2)	粘土	炭化物、鐵土粒を含む
2	灰黄褐色(10YR 5/2)	粘土質シルト	炭化物を含む	7	*	(2.5Y 5/2)	*
3	黒褐色(10YR 5/2)	*	炭化物、砂を含む	8	* (*)	*	細灰黄色砂を多量に含む
4	* (*)	粘土	木片を含む	9	灰黄褐色(10YR 5/2)	*	
5	灰黄褐色(10YR 5/2)	シルト	炭化物、木片を含む	10	にい黄褐色(10YR 5/2)	砂質シルト	

第29図 S D5029溝跡セクション図

ている。SD 5003溝跡出土の破片と接合した（第35図1）。体部破片には外面に格子状の押印が施されているものがある（第30図1～4）。これらはいずれも胎土が灰白色を呈し、表面が赤褐色に焼き上がっている。また口縁部の形態は常滑窯の製品に類似するものがあり、赤羽一郎氏の編年によれば12世紀後半のものに相当する（註1）。



No	性別	器種	層位	外 面 調査	内 面 調査	圖 名	回数No	登録No
1	無鉢陶器	盤	1 層	ヘラナデ	ヨコナデ	格子目印	16-15	R-45
2	*	*	3 層	*	*	*	16-15	R-51
3	*	*	2 層	*	*	*	16-17	R-47
4	*	*	1 層	*	*	*	16-18	R-44
5	*	*	3 層	*	*	多面状 (?) 印	16-19	R-49
6	灰釉陶器	碗	1 層	輪郭押印後さざなぎ	ロクロナデ	輪郭出しによる蛇ノ目高台	16-5	R-19
7	白 瓷	*	*	体部～底部 四軒ヘラナデ			16-30	R-1

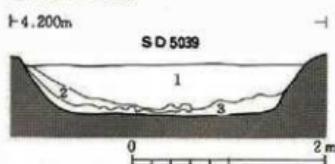
第30図 SD 5029溝跡出土遺物

〔SD 5051溝跡〕 新しい屋敷跡の南辺を成すと考えられる東西溝跡である。東端部はSD 5029溝（新段階）によって切られている。しかし、SD 5029溝跡の東側にはのびていないため、SD 5029溝跡の古段階では合流していたと考えられる。埋土の上層には地山ブロックが大量に含まれており、人為的に埋め戻された様相を呈している。規模は上幅3.7m、深さ0.6mを計る。遺物は古代の土師器、須恵器とともに、施釉陶器壁の体部破片が1点出土している。（第33図4）外面には条線や花文を配した押印が施され、灰釉が薄くハケ塗りされている。胎土は灰色を呈している。中世において斐類に施釉した製品は渥美窯に類似が見られることから同窯の製品と考えられる。

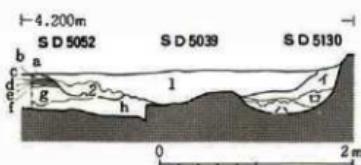
〔SD 5052溝跡〕 新しい屋敷跡の内側をめぐる溝の内、南辺を成す東西溝である。東側に位置するSD 5039南北溝によって切られている。本溝跡はそれと接するところで北に曲がり、ほぼ同位置でのびている。規模は、上幅2.2～2.0m、深さ0.6～0.5mを計る。埋土は全体に粘性を帯びた層が多い。遺物は古代の土師器、須恵器とともに古銭〔天聖元年〕(1023年初鋳)が1点出土している。また、西端部の第2層からカキとアサリの貝殻が大量に出土している。

〔SD 5003溝跡〕 調査区中央部で検出した新しい屋敷跡に係る南北溝跡である。SD 5029溝跡を埋めて整地し、屋敷を東に拡大した時期の東辺を成している。北端部はSD 5007東西溝跡に合流し、それは更にSD 5029溝跡に連結している。南端部は西に緩やかに弯曲している。南半部では同位置で2時期の重複を確認しているが、新段階（B期）のものは北へ行くほど浅く

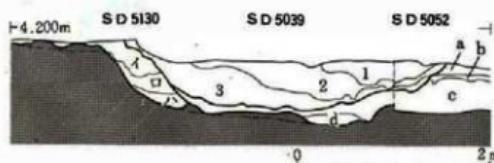
① 調査区南側



② 調査区南半（南側より）



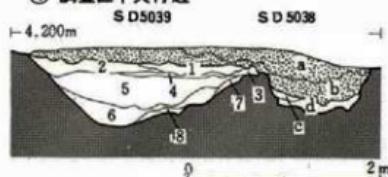
③ 調査区南半（北側より）



③ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD 5039			
1 黒褐色 (10YR 3/6)	シルト	炭化物、鐵土粒を含む	
2 黄褐色 (2.5Y 4/6)	*	黒褐色土ブロックを含む	
3 黑褐色 (10YR 3/6)	*	下部に黄褐色土ブロックを含む	
SD 5052			
a にない黄褐色 (10YR 3/6)	シルト		
b 黄褐色 (10YR 3/6)	粘土		
c 緑灰褐色 (10Y R 5/6)	粘土	黄褐色土粒を含む	
d *	*	褐色土色を多く含む	
SD 5130			
イ 黄褐色 (10YR 3/6)	粘土質シルト	上部に砂を含む	
ロ *	(+)	*	にない黄色土ブロックを含む
ハ 黑褐色 (2.5Y 3/6)	*		

④ 調査区中央付近



① 土層観察表

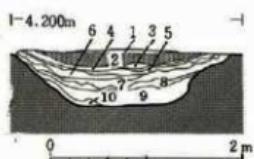
層位	土色	土性	備考
1	灰黃褐色 (10Y R 5/6)	シルト	鐵土粒、炭化物を含む
2	*	*	*
3	*	粘土質シルト	同色の砂を含む
4	*	*	炭化物をわずかに含む
5	黒褐色 (10YR 3/6)	粘土	捕獲遺体を含む
6	にない黃褐色 (10YR 3/6)	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む
7 オリーブ褐色 (5Y 3/6)	粘土	綠色砂ブロックを含む	

④ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
SD 5039			
1 灰黃褐色 (10Y R 5/6)	シルト	鐵土粒、炭化物を含む	
2 *	(+)	*	
3 *	(+)	粘土質シルト	同色の砂を含む
4 *	(+)	*	炭化物をわずかに含む
5 黑褐色 (10YR 3/6)	粘土	捕獲遺体を含む	
6 にない黃褐色 (10YR 3/6)	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	
7 オリーブ褐色 (5Y 3/6)	粘土	綠色砂ブロックを含む	
SD 5038			
a にない黃褐色 (2.5Y 3/6)	シルト	鐵土粒を含む	
b 黄褐色 (10YR 3/6)	粘土質シルト	鐵土粒、炭化物を含む	
c 黑褐色 (2.5Y 3/6)	粘土		
d 黑褐色 (10YR 3/6)	*	壁際は砂との互層	

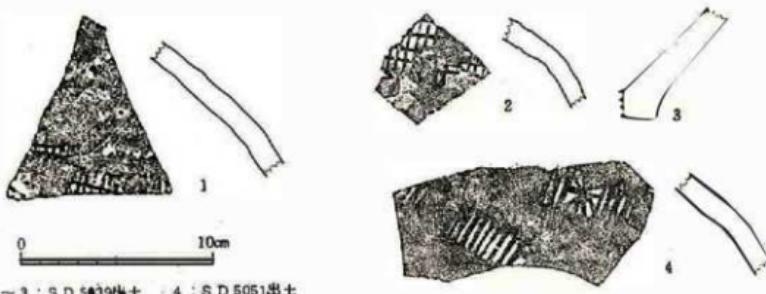
第31図 SD 5038・5039・5052・5130溝跡セクション図

SD 5052溝跡（調査区南西部）



層位	土色	土性	備考
1	灰黃褐色 (10Y R 5%)	シルト	黄褐色土ブロックを含む アサリとカキの殻からなる層
2			
3	灰黃褐色 (10Y R 5%)	粘土質シルト	黒褐色粘土との互層
4	黑 色 (2.5Y R 5%)	粘 土	黒色粘土、植物種子を含む
5	黑 黄 色 (2.5Y R 5%)	*	炭化物、
6	地 底 黄 色 (2.5Y R 5%)	*	*
7	黑 色 (2.5Y R 5%)	*	地山ブロックを含む
8	(+)	*	
9	(+)	*	堆灰黄色砂との互層
10	黄 色 (2.5Y R 5%)	シルト	地山層落土

第32図 SD 5052溝跡セクション図



1～3：SD 5039出土 4：SD 5051出土

No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	備考	回収%	登録%
1	無釉陶器	甌	1層	ヘラナデ	ヨコナデ	格子目印	16-22	R-42
2	*	*	*	*	*	*	16-23	R-43
3	*	*	*	*	*		16-24	R-57
4	施釉陶器	皿	2層	*	*	四足目 外品に近鉢をハケ塗り	16-20	R-48

第33図 SD 5039・5051溝跡出土遺物

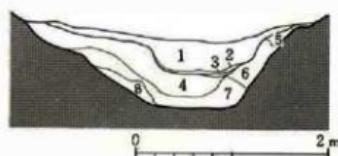
なっており、北半部における状況は明瞭でない。古段階（A期）のものでみると、規模は上幅3.2～2.8m、深さ1.1～0.9mを計る。埋土は、下層が砂質土、上層が粘質土となっており、自然に埋没した様相を呈している。遺物は、無釉陶器甌、施釉陶器皿、木製の捏鉢・下駄・木製鍤・漆器椀・古錢などが出土している。施釉陶器皿（第35図3）は、形態から瀬戸・美濃窯の製品と考えられ、伊藤嘉章氏の編年によれば16世紀後半頃のものに類似している（註2）。古錢は熙寧元宝（1068年初鋤）と永樂通宝（1408年初鋤）である。

（註1）赤羽一郎『常滑焼—中世窯の様相—』1984

（註2）伊藤嘉章「瀬戸・美濃窯における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要2』1988

① 調査区南側

1-4.200m

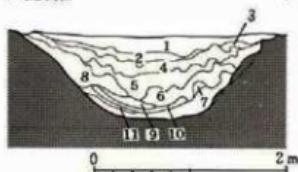


① 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 4/2)	粘	地山粉、炭化物を含む
2	黒色(2.5Y 3/2)	シルト	炭を混入する
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘	炭化物をわずかに含む
4	* (*)	*	黄褐色砂層を上部に含む
5	暗灰褐色(2.5Y 3/2)	砂質シルト	
6	オリーブ黒色(5Y 3/2)	*	地山ブロックを含む
7	* (5Y 3/2)	*	唯オリーブ灰砂との互層
8	暗オリーブ色(5G Y 3/2)	砂	上部に黒褐色粘土を含む

② 調査区中央付近

1-4.200m

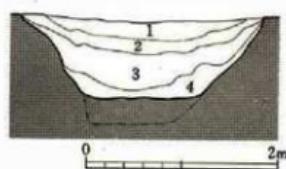


② 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰褐色(10YR 4/2)	シルト	焼土粉、炭化物を含む
2	褐色(10YR 4/2)	*	炭を混入、灰褐色土を含む
3	黒褐色(10YR 4/2)	*	焼土粉、炭化物を含む
4	* (*)	粘	植物遺体を含む
5	* (*)	*	
6	* (*)	*	暗灰褐色砂質土を含む
7	オリーブ黒色(5Y 3/2)	*	砂を多く含む
8	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む
9	オリーブ黒色(5Y 3/2)	粘	砂を多く含む
10	* (*)	*	暗オリーブ砂を粒状に含む
11	暗オリーブ灰(5G Y 3/2)	砂	粘土をわずかに含む
12	* (*)	*	オリーブ黒色粘土層を含む

③ 調査区北側

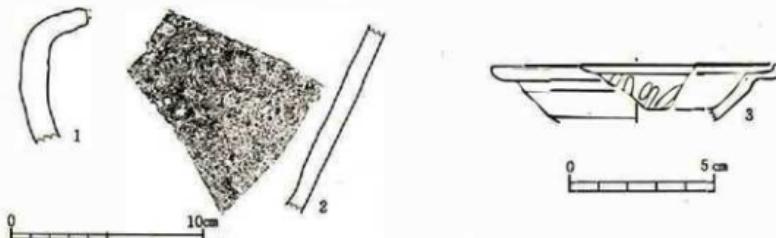
1-4.200m



③ 土層観察表

層位	土色	土性	備考
1	灰褐色(10YR 4/2)	シルト	焼土粉、炭化物を含む
2	黒褐色(10YR 4/2)	粘	砂、炭化物を含む
3	* (2.5Y 3/2)	*	砂ブロックを壁間に含む
4	オリーブ黒色(5Y 3/2)	*	砂との互層

第34図 SD5003溝跡セクション図



No	種別	器種	層位	外 面 調 査	内 面 調 査	備 考	測定No	登録No
1	無輪陶器	壺	I 層	ヨコナデ	ヨコナデ	SD5003溝(1層)と複合	16-14	R-40
2	*	*	B期2層	ヘラナデ	*		16-13	R-45
3	纺錘形器	瓶	B期1層	ロクロナデ	ロクロナデ		16-31	R-41

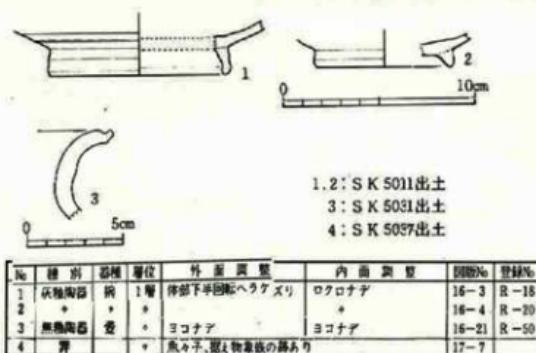
第35図 SD5003溝跡出土遺物

C. 井戸跡・土塙

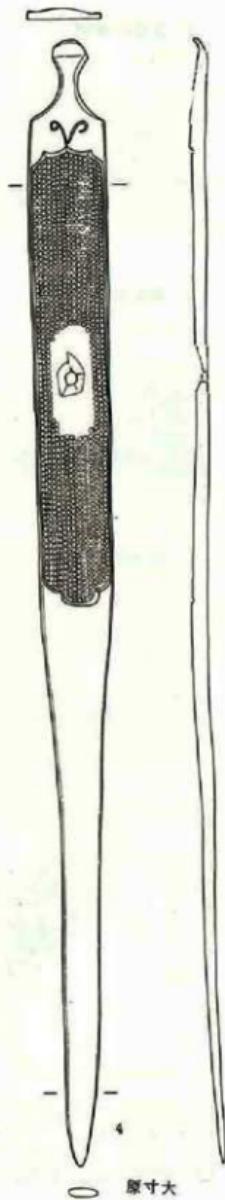
中世以降に属すると見られる井戸跡や土塙は調査区西半部を中心に分布している。年代を特定し難いものが多いが、中世以降の包含層である第Ⅲ層から掘り込んだS E 5019・5020・5021・5022井戸跡や、埋土から中世陶器が出土したS E 5008・5026井戸跡、S K 5031・5037土塙などがこの時期のものと見えることができる。井戸跡はすべて素掘りのもので、側を備えたものは発見していない。また、土塙と区別し難いものもあるが、平面形が凡そ円形を呈し、平面規模に対して著しく浅くないものを一応井戸跡と考えた。

〔S E 5008井戸跡〕 S K 5037土塙の南半部埋土上で検出した井戸跡である。平面形は歪んだ円形を呈しており、規模は径3.2～2.5m、深さ1.4mを計る。埋土は、下層に地山の崩壊土が厚く堆積しており、その後人為的に埋め戻された様相を呈している。遺物は古代の土師器、須恵器、绿釉陶器などとともに無釉陶器甕が出土している。

〔S E 5021井戸跡〕 調査区中央部の第Ⅲ層から掘り込んだ井戸跡である。平面形は梢円形を呈し底面は棱鉢状になっている。規模は、長径3.7m、短径3.2m、深さ1.2mを計る。埋土の上層には地山ブロックを大量に含む土が堆積しており、これは本井戸跡の西側に位置するS D 5029溝跡の上層に堆積しているも



第36図 土塙出土遺物

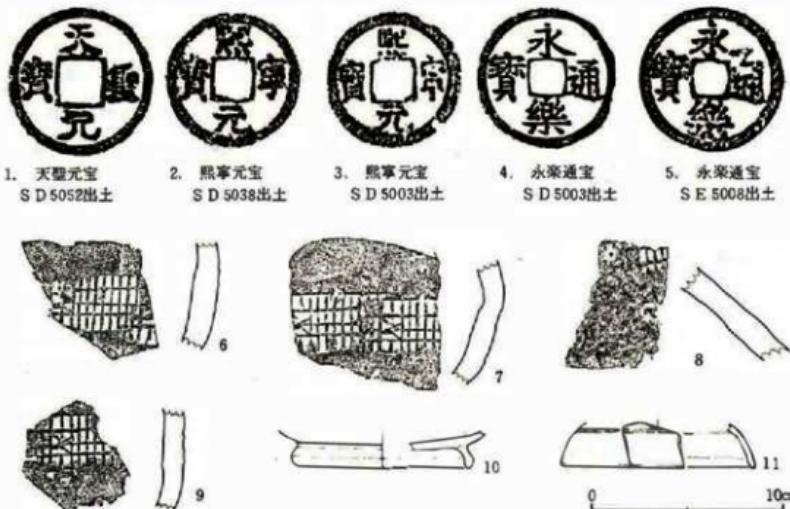


のと近似している。両者は一連の作業によって埋められて整地された可能性が高い。遺物は無釉陶器壺、青磁碗、曲物容器などが出土している。

〔S K5031土塙〕 調査区西半部の地山上で検出した土塙である。平面形は円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は径約3m、深さ0.6mを計る。遺物は無釉陶器壺などが出土している（第36図3）。これは口縁部の破片資料で、頸部がやや直立して口縁が外反する形態を有している。口縁部先端に面取りが施されている。堅く焼成されており、褐色を呈している。口縁部の形態は常滑窯の製品に類似し、赤羽一郎氏の編年によれば12世紀後半のものに類似している（註）。

〔S K5037土塙〕 調査区西半部の地山上で検出した土塙である。新しい屋敷跡の内側をめぐるSD 5042溝跡と連結している。平面形は歪んだ円形を呈し、規模は径約5m、深さ1.2mを計る。SD 5042溝跡とともに自然に埋没した様相を呈している。遺物は銅製品の笄などが出土している（第36図4）。耳掻きは表向きにつけられている。

（註）赤羽一郎前掲書。



No.	種別	基地	部位	外面調査	内面調査	雷 考	回収地	登録番号
6	無釉陶器	壺	I層	ヘラナギ	ヨコナギ	猪子田印	16-25	R-55
7	*	*	*	*	*	*	16-24	R-54
8	*	*	*	*	*	*	16-27	R-55
9	*	*	*	彦根出張ヘラナギ 彦根出張ヘラナギ 彦根出張ヘラナギ	*	*	16-28	R-53
10	灰陶陶器	壺	*	ロクロナギ	三日月高台	16-9	R-24	
11	綠釉陶器	器	*	ヘラミガキ				R-8

第37図 古銭及び遺構外出土遺物

III まとめ

今回の調査では、古墳時代から江戸時代に至る遺構、遺物を発見した。この内、古墳時代については現在整理作業が進行中であり、報告するまでに至っていない。また、江戸時代については数基の土塁を発見したにすぎない。ここでは比較的遺構、遺物の検討が進んだ古代と中世の遺構について、昨年度調査地区及び隣接する宮城県教育委員会担当地区の成果を援用して簡単にまとめておきたい。

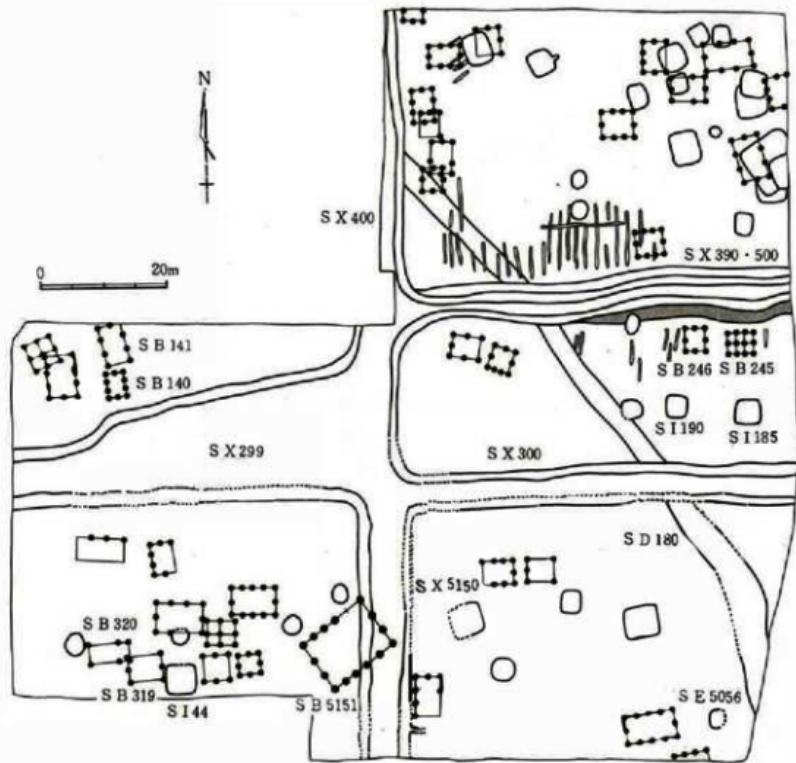
1. 古代

遺構の構成から、I 道路建設以前、II 道路機能時、III 道路廃絶後の3つの段階に分けることができる。

〔I段階〕道路建設以前の遺構としてはSB 5151建物跡、SD 180溝跡などがある。主軸方向が真北に対して西に大きく傾いているのが特徴である。また昨年度の調査区で検出したSB 140・141・245・246・319・320建物跡、SI 44・185・190・235住居跡などは奈良時代に位置づけられているところからこの段階に属するものである。主軸方向は凡そ真北を向いている。主軸方向が異なる前者(a)と後者(b)は時期差を示すと考えられるが、両者の遺構間で重複がないため新旧関係は不明である。しかし、(b)期の方向がII段階の遺構のそれと比較的近似することから(a)期が(b)期より古い可能性が高い。(a)期のSD 180溝跡は埋土の下層から粟甕式に属する土師器や須恵器の甕が出土しており、年代の上限が奈良時代以前に遡る可能性もある。

〔II段階〕道路が建設され、機能した時期である。SX 500東西道路が建設された段階(a)から、SX 299・300・390東西道路やSX 400・5150南北道路が建設された段階(b)へと整備されている。これらの道路の周辺には建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、畝状遺構などが数多く作られている。それらの主軸方向は真北を基準としており、道路跡と重複しているものは皆無である。(a)期のSX 500東西道路には側溝に3時期の重複が認められ、(b)期の東西・南北道路にも3~4時期の重複が確認されている。なお、10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰は(b)期の2番目に新しい側溝埋土中に認められている。また、これらの道路跡の変遷と周辺の遺構との関連は明確にし難いが、SE 5056井戸跡は、出土遺物や掘方埋土に灰白色火山灰を含むことから(b)期の最終段階に伴うものであろう。

〔III段階〕道路廃絶後の遺構としては、大量の遺物を含むSD 14溝跡などがある。これは、今回の調査区では検出していないが、北側に位置する県教育委員会担当地区を東西に蛇行し、河川跡と考えられている。

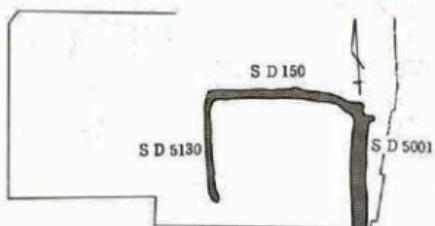


第38図 遺構模式図（古代）

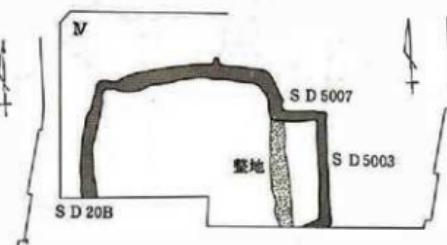
2. 中世

- (1) 昨年度の調査で発見した屋敷跡（「新しい屋敷跡」）の東半部を調査した。その結果、東辺を成す溝跡に3回の作り替えが認められ、西辺における変遷と一致する。
- (2) この作り替えによって、当初東西44m、南北44mの屋敷が最終的には東西71m、南北44m以上に変化しており、屋敷地の面積が飛躍的に増加したことが判明した。
- (3) 昨年度の調査では、この屋敷跡の東に別の区画域の存在を推定していたが、調査の結果、一時期古い別の屋敷跡を発見した（「古い屋敷跡」）。
- (4) 年代は「新しい屋敷跡」が16世紀頃、「古い屋敷跡」は出土遺物が少ないので不明である。

古い屋敷跡



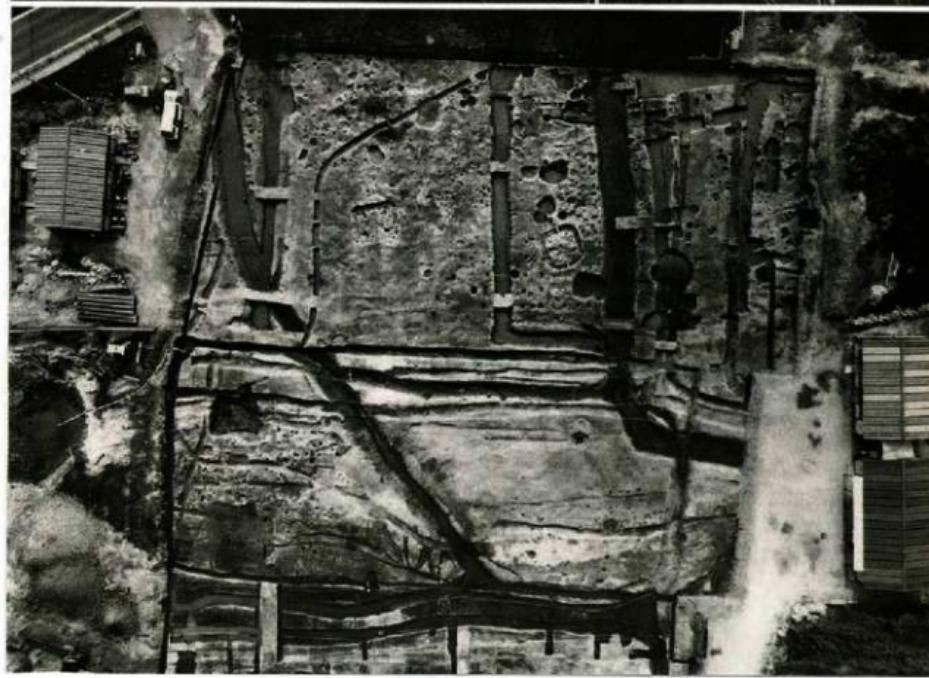
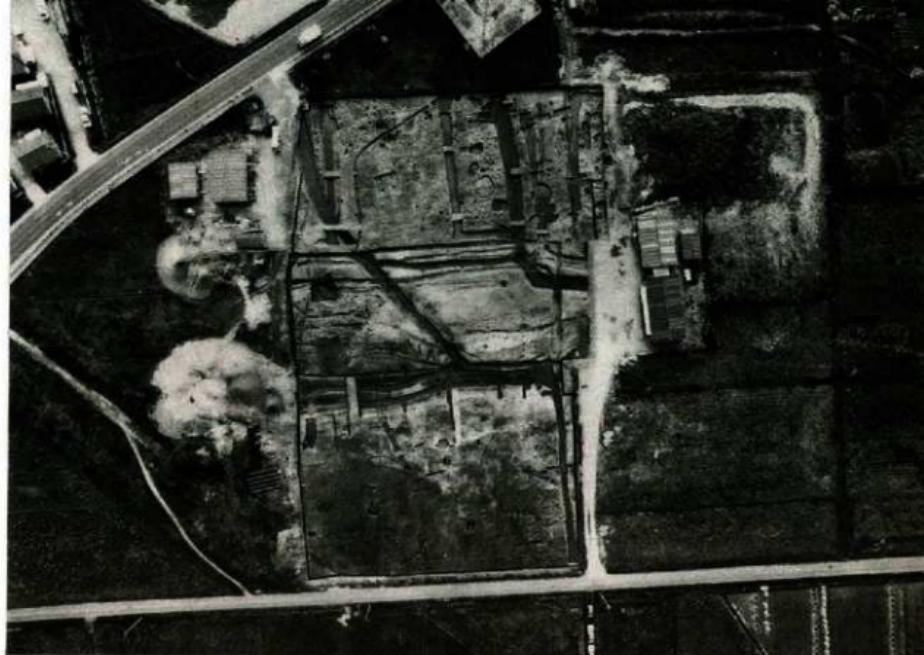
新しい屋敷跡



第39図 遺構変遷図（中世）

（引用・参考文献）

1. 宮城県教育委員会「山王遺跡」宮城県文化財調査報告書138集（1990）
2. 宮城県教育委員会・利府町教育委員会「利府町郷聚遺跡Ⅱ」
宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集（1990）
3. 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要録」（1980）
4. 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所「多賀城跡政府跡 本文編」（1982）
5. 奈良国立文化財研究所「木器集成図録—近畿古代篇」奈良国立文化財研究所史料第27号（1984）



図版 1

上 調査区全景

下 調査区全景 (B-E 区)



S X5150道路跡
(南側より)



調査区西端部突出構
(北側より)



S B5151建物跡
(北西側より)

S B5151建物跡

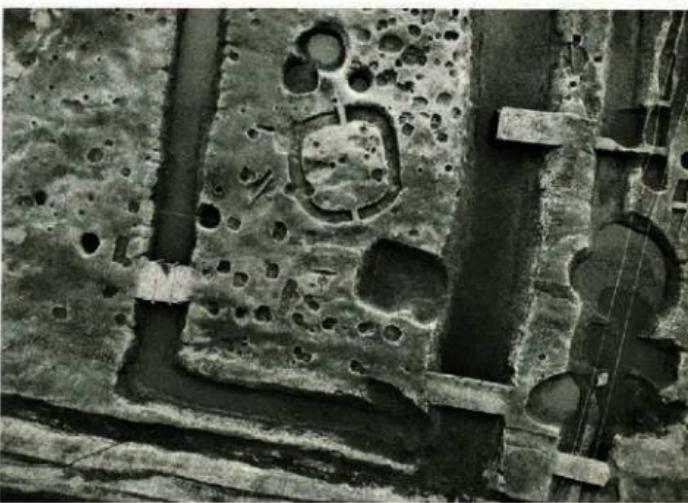
南東隅柱穴



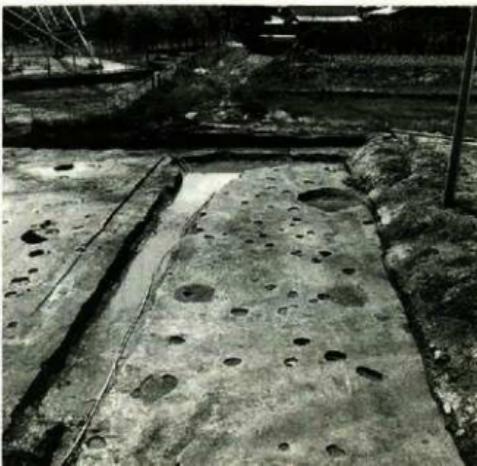
S B5153・5154

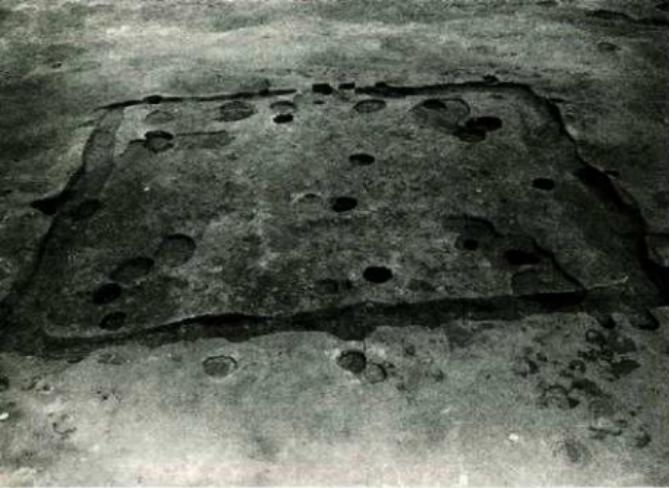
5173建物跡

(北側より)



調査区西端部検出建物群（北側より）





S I 5065住居跡

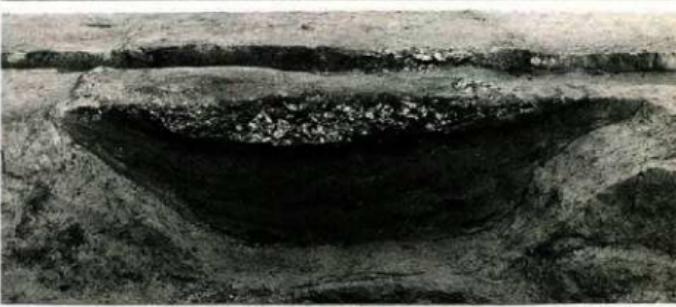
(南側より)



S D180溝跡
(北側より)

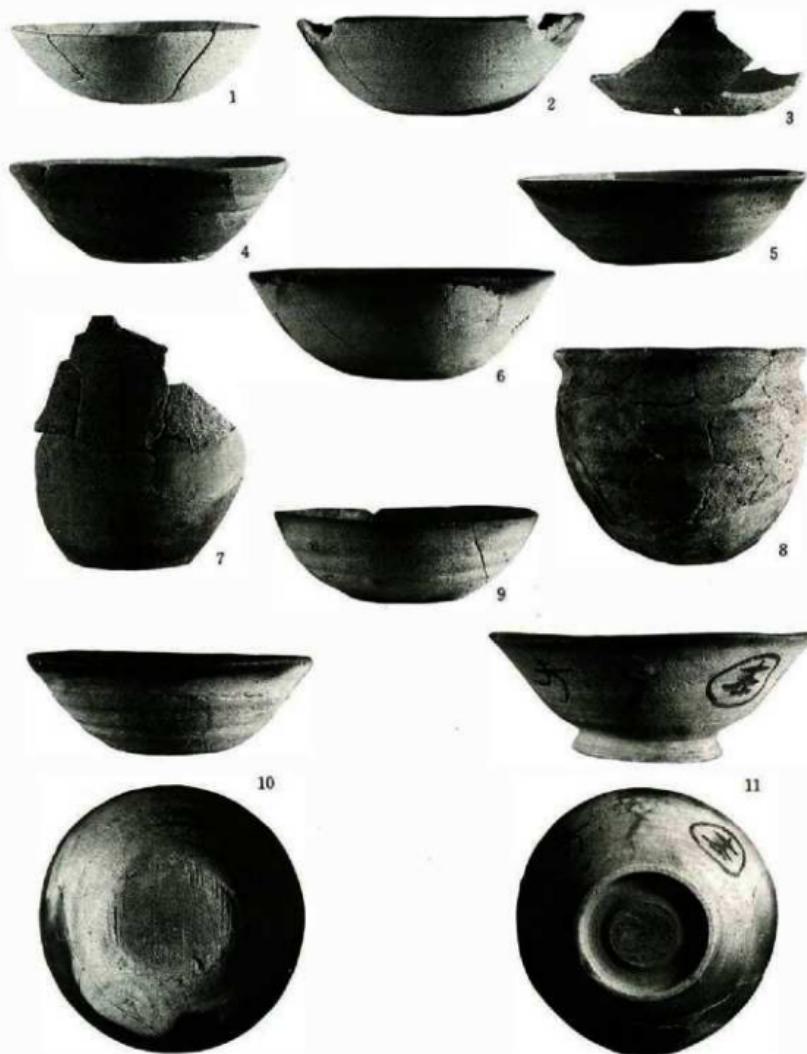


S D5#52溝跡
(東側より)



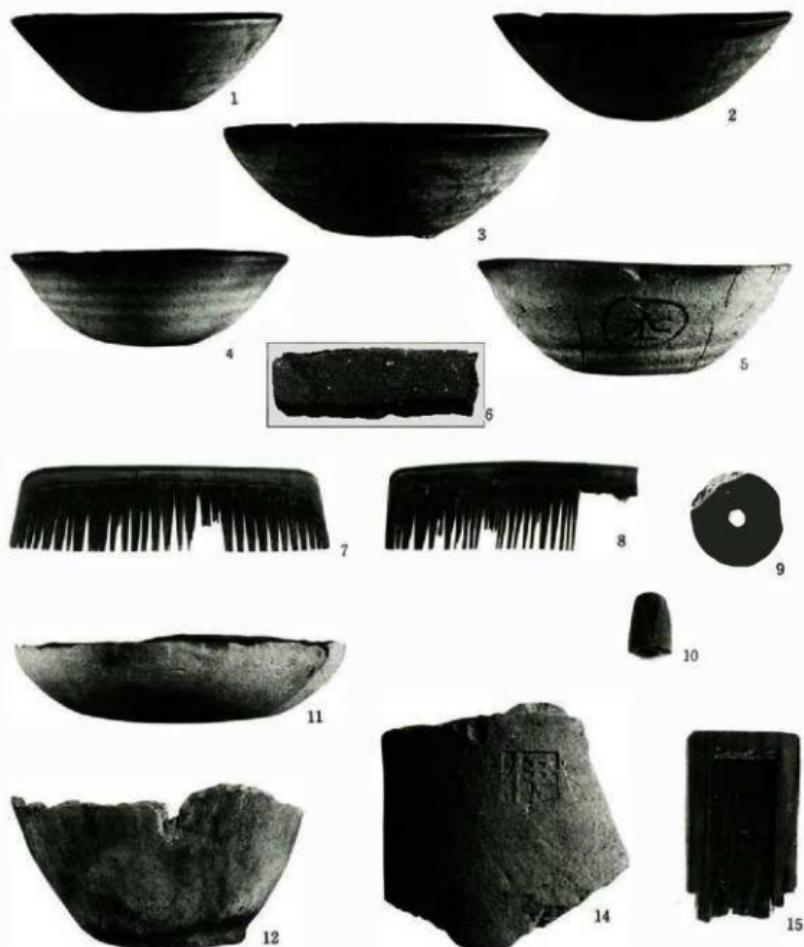
S K5086・5092土塙（東側より）





- | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 赤燒土器杯 SD 5064 第6圖1 | 5. 須惠器杯 SD 5064 第6圖5 | 9. 土師器杯 SE 5021 |
| 2. 土師器杯 * | 6. 土師器杯 * | 10. “” SE 5056 第11圖4 |
| 3. 須惠器杯 * | 7. * 瓢 * | 11. * * |
| 4. * | 8. * | 5. |

圖版6 出土遺物



1.	土師器杯	SE 5056	第11圖1	9.	用達不明木製品	SE 5056
2.	◦ ◦	◦	◦ 2	10.	◦	◦
3.	◦ ◦	◦	◦ 3	11.	土 師 器 杯	SE 5069 第13圖1
4.	◦ ◦	◦	◦ 6	12.	◦	◦ 2
5.	◦ ◦	◦	◦ 7	13.	須惠器高台杯	◦ ◦ 3
6.	風字 琥	◦	◦ 8	14.	丸 瓦	◦ ◦ 4
7.	横 櫛	◦	◦ 10	15.	箱 狀 木 製 品	◦
8.	◦	◦	◦ 9			

圖版7 出 土 遺 物



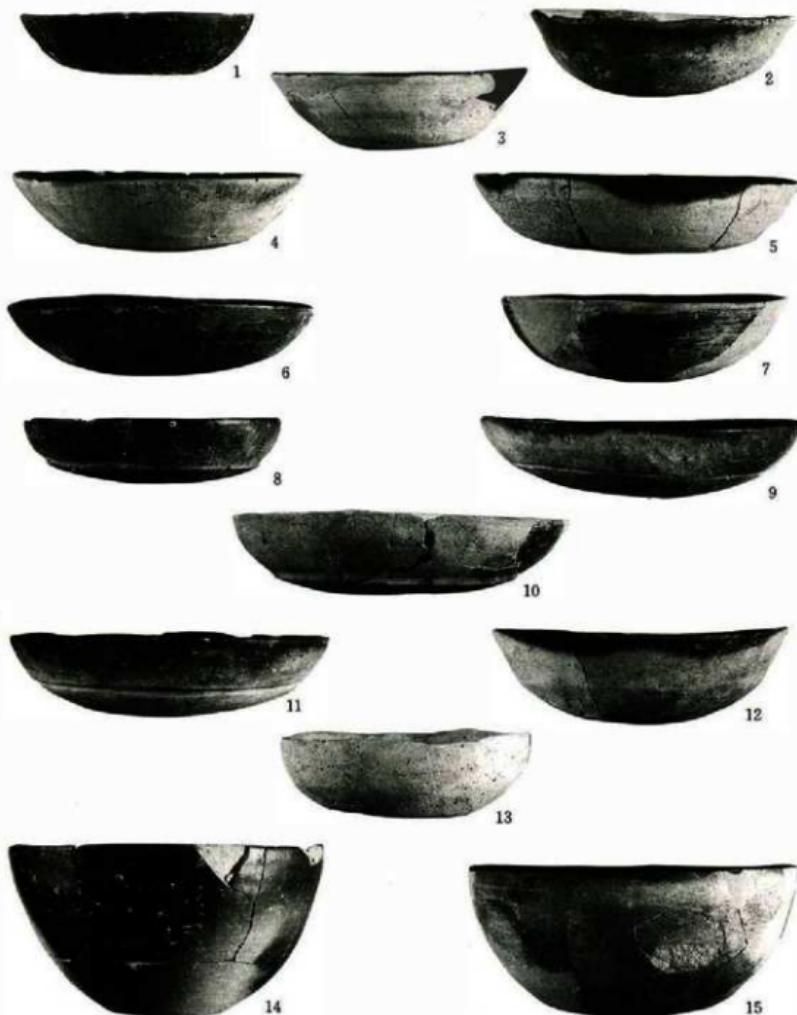
1.	土師器	杯	第16図1	5.	土師器	杯	第16図5	9.	土師器	杯	第16図9
2.	+	+	6	2	6.	+	+	6	10.	+	+
3.	+	+	+	3	7.	+	+	7	11.	+	+
4.	+	+	+	4	8.	+	杯	8	12.	+	+

図版8 出土遺物 (SD180溝跡)



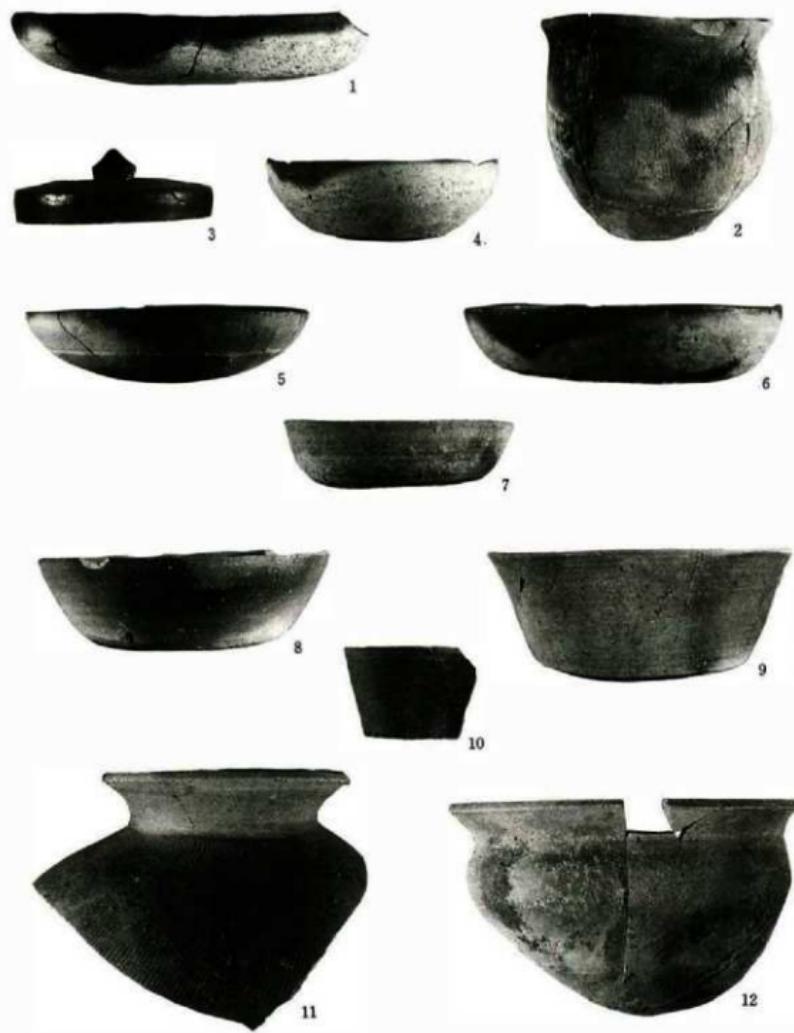
- | | | |
|----------------|----------------|---------------------|
| 1. 須恵器 杯 第17図1 | 6. 須恵器 杯 第17図6 | 11. 須恵器 高台付杯 第17図11 |
| 2. * | * | 12. * 薩 * |
| 3. * | 3. 高台付杯 | 13. * 高 杯 * |
| 4. * | 4. * | 9. |
| 5. * | 5. * | 10. |

図版 9 出土遺物 (SD180調跡)



1.	土師器	杯	第18圖1	6.	土師器	杯	第18圖6	11.	土師器	杯	第18圖11
2.	*	*	*	2.	*	*	*	7.	*	*	*
3.	*	*	*	3.	*	*	*	8.	*	*	*
4.	*	*	*	4.	*	*	*	9.	*	*	*
5.	*	*	*	5.	*	*	*	10.	*	*	*
				10.	*	*	*	11.	*	*	第18圖15
					*	*	*	12.	*	*	14.
					*	*	*	13.	*	*	
					*	*	*	14.	*	*	
					*	*	*	15.	*	*	

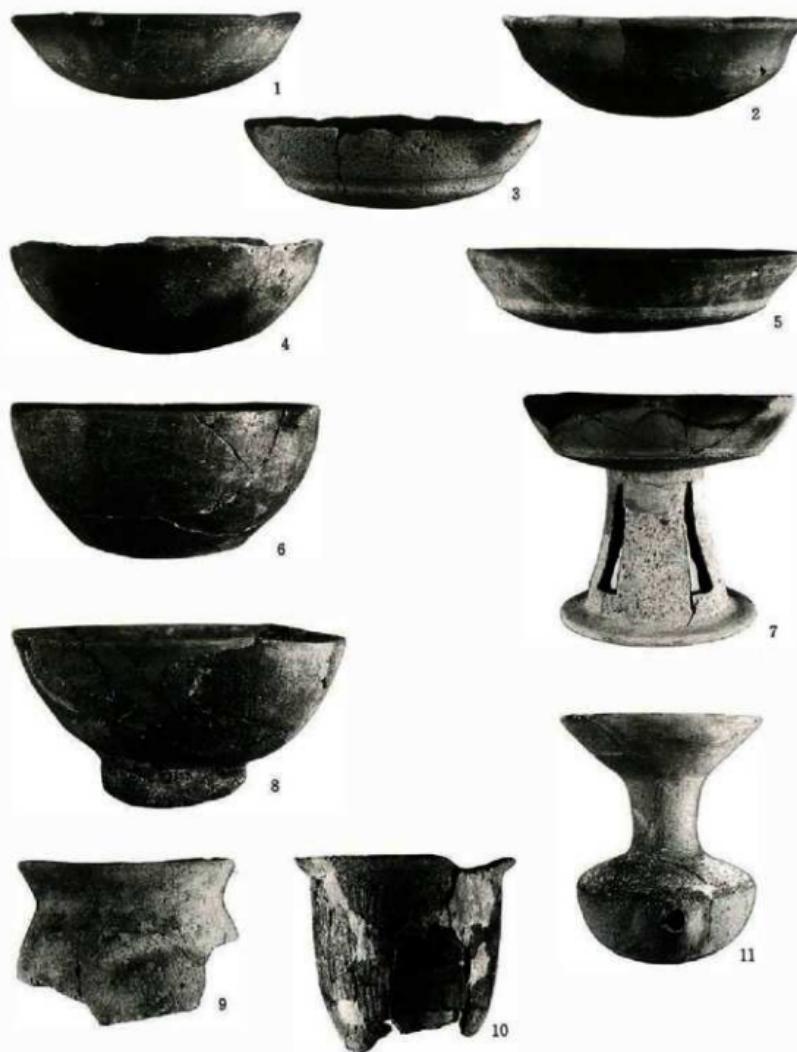
圖版 10 出土遺物 (SD180溝跡)



1. 土師器 高杯 第19図1	5. 土師器 杯	9. 須恵器 杯 第19図6
2. " 豐 "	6. "	10. "
3. " 蓋 "	7. 須恵器	11. "
4. "	8. "	12. "

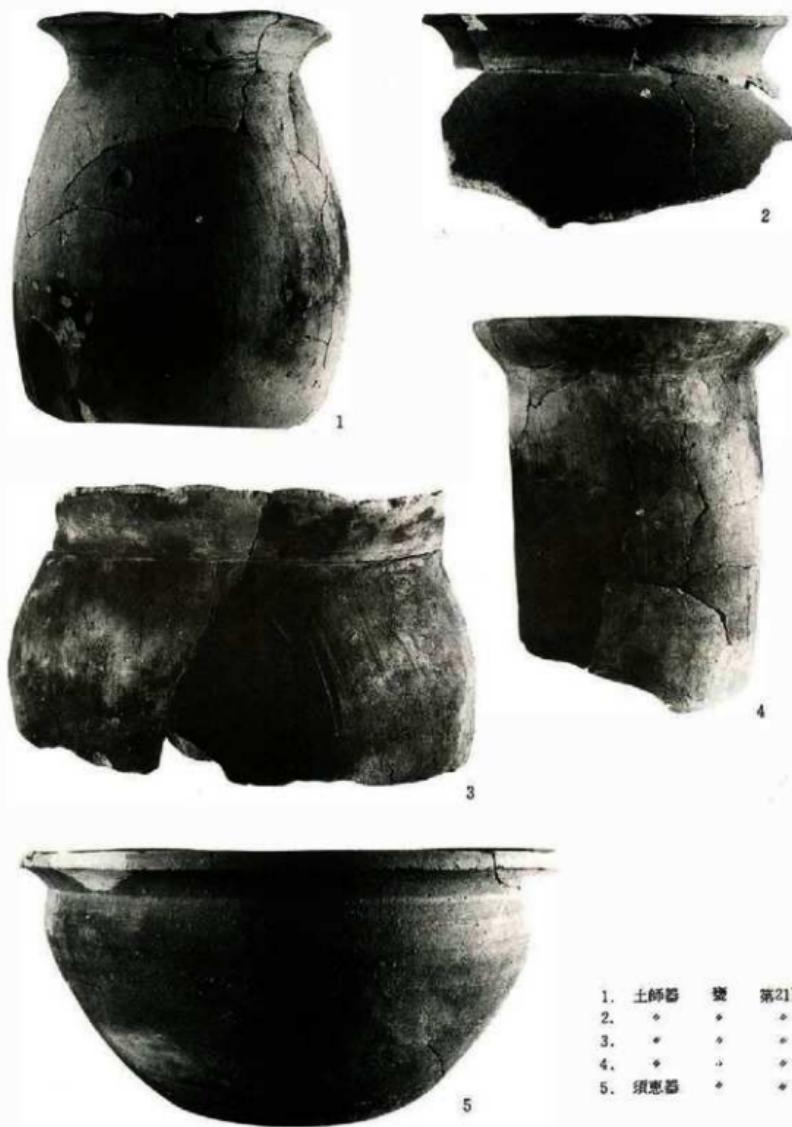
第19図5
第19図4

図版 11 出土遺物 (SD180溝跡)

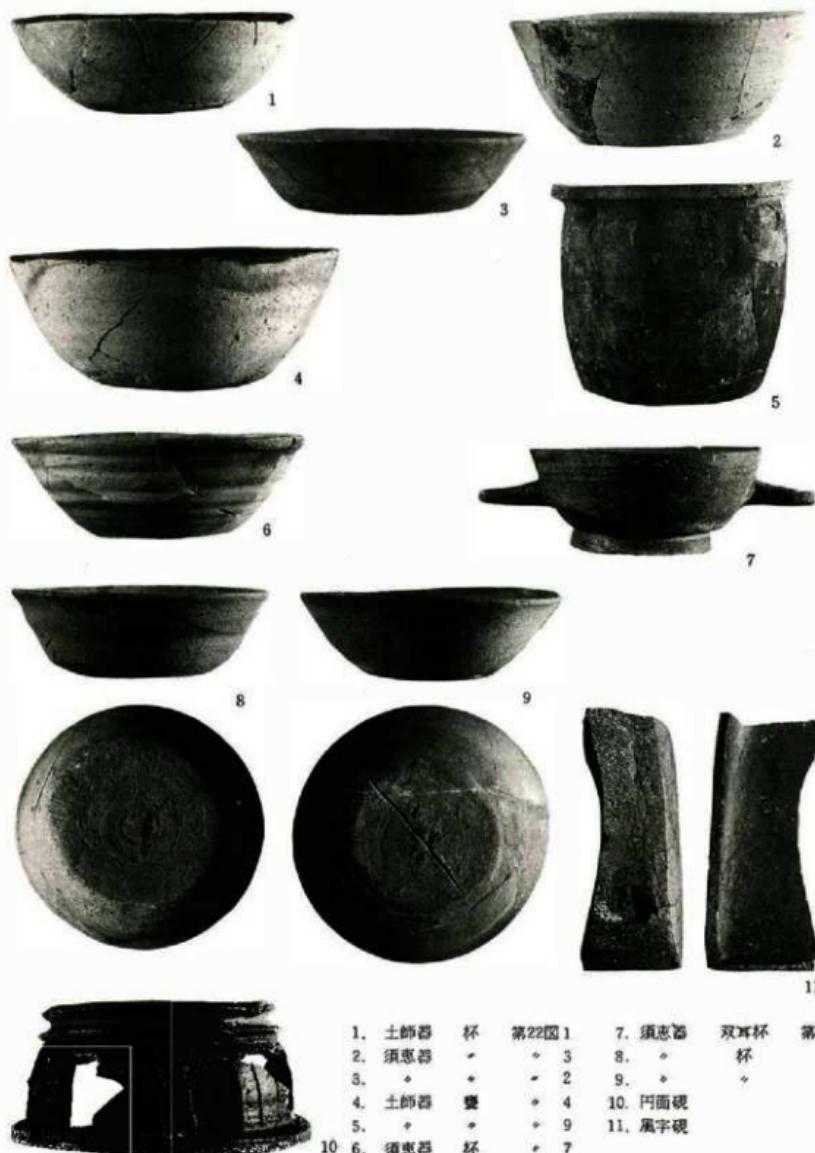


- | | | | | | | | | |
|--------|---|--------|--------|----|--------|---------|---|---------|
| 1. 土師器 | 杯 | 第20圖 1 | 5. 土師器 | 杯 | 第20圖 5 | 9. 土師器 | 甕 | 第20圖 8 |
| 2. * | * | * | 6. * | * | * | 10. * | * | 第21圖 5 |
| 3. * | * | * | 7. * | 高杯 | * | 11. 須惠器 | 匙 | 第20圖 10 |
| 4. * | * | * | 8. * | 鉢 | * | | | |

圖版 12 出土遺物 (SD180溝跡)

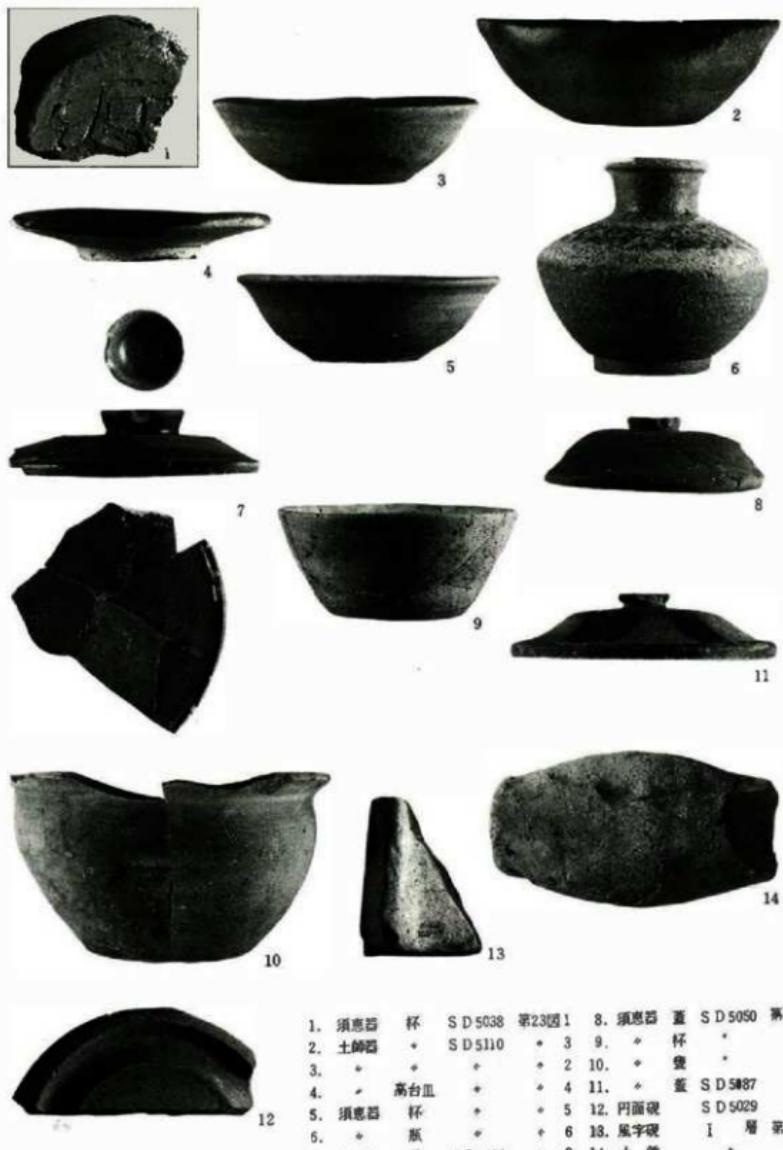


図版 13 出土遺物 (SD180溝跡)



1.	土師器	杯	第22図 1	7.	須恵器	双耳杯	第22図 8
2.	須恵器	*	*	8.	*	杯	*
3.	*	*	*	9.	*	*	*
4.	土師器	盤	*	10.	円面鏡	*	*
5.	*	*	*	11.	黒字鏡	*	*
10.	6.	須恵器	杯	11.			
			*				

図版 14 出土遺物 (SK5086・5092土塗)



図版 15 出土遺物

- | | | | | | |
|----------|---------|-------|----------|---------|---------|
| 1. 須恵器 杯 | SD 5038 | 第23図1 | 8. 須恵器 盖 | SD 5050 | 第23図9 |
| 2. 土師器 | * | | 9. * | * | 7 |
| 3. * | * | | 10. * | * | |
| 4. * 高台皿 | * | | 11. * | 蓋 | SD 5087 |
| 5. 須恵器 杯 | * | | 12. 円面硯 | SD 5029 | |
| 6. * | * | | 13. 黒字硯 | 1 層 | 第23図10 |
| 7. 土師器 盖 | SD 5050 | | 14. 土 磨 | * | 11 |



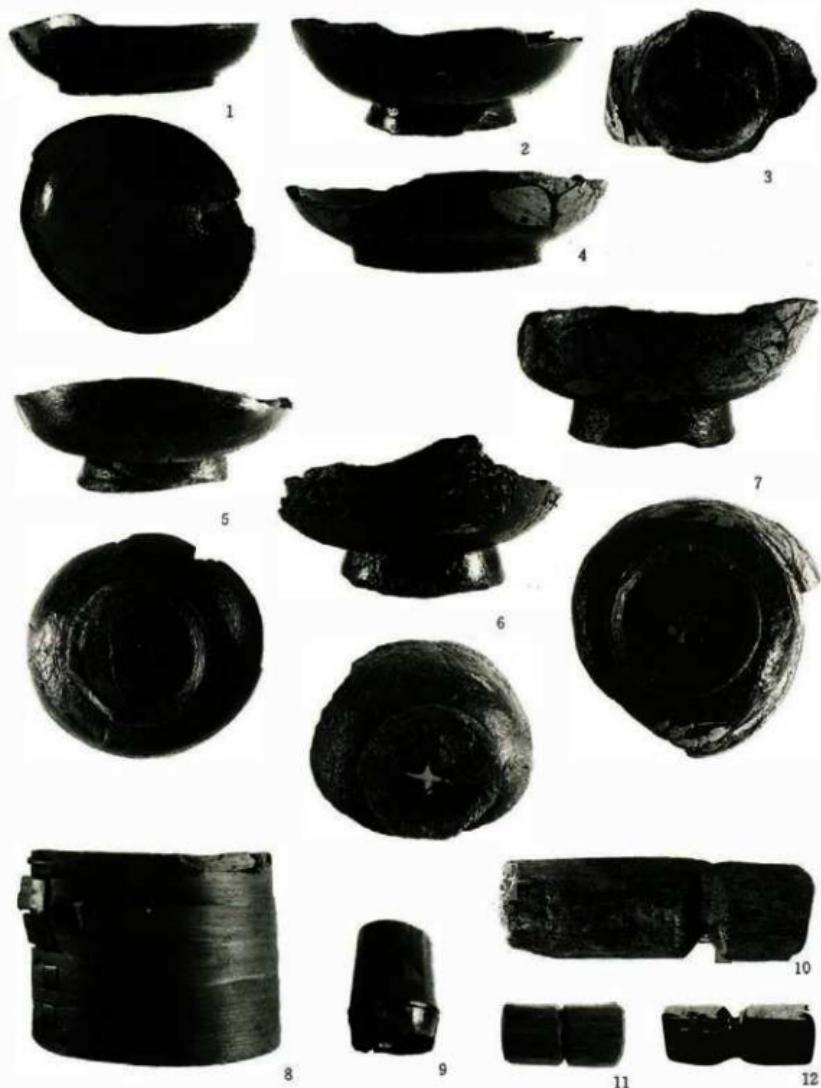
- | | | |
|------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1. 灰胎陶器底 SD 5038 R -11 | 12. 绿胎陶器檐 I 层 R -10 | 23. 无胎陶器壁 SD 5039 第33图2 |
| 2. * * SD 5029 R -27 | 13. 无胎陶器壁 SD 5003 第35图2 | 24. * * * * 3 |
| 3. 桶 SK 5011 第36图1 | 14. * * * * 1 | 25. * * * I 层 第37图6 |
| 4. * * * * 2 | 15. * * * SD 5029 第30图1 | 26. * * * * * 7 |
| 5. * * * SD 5029 第30图6 | 16. * * * * 2 | 27. * * * * * 8 |
| 6. * 瓶 SD 5024 R -36 | 17. * * * * 3 | 28. * * * * * 9 |
| 7. * 桶 * R -12 | 18. * * * * 4 | 29. * * * SD 5043 R -52 |
| 8. * * * SD 5064 R -38 | 19. * * * * 5 | 30. 白 磁柄 SD 5029 第30图7 |
| 9. * * * I 层 第37图10 | 20. 绿胎陶器壁 SD 5051 第33图4 | 31. 施胎陶器壁 SD 5003 第35图3 |
| 10. 绿胎陶器 SD 5064 R -4 | 21. 无胎陶器 SD 5031 第36图3 | |
| 11. * * * SD 5034 R -2 | 22. * * SD 5039 第33图1 | |

圖版 16 出土遺物



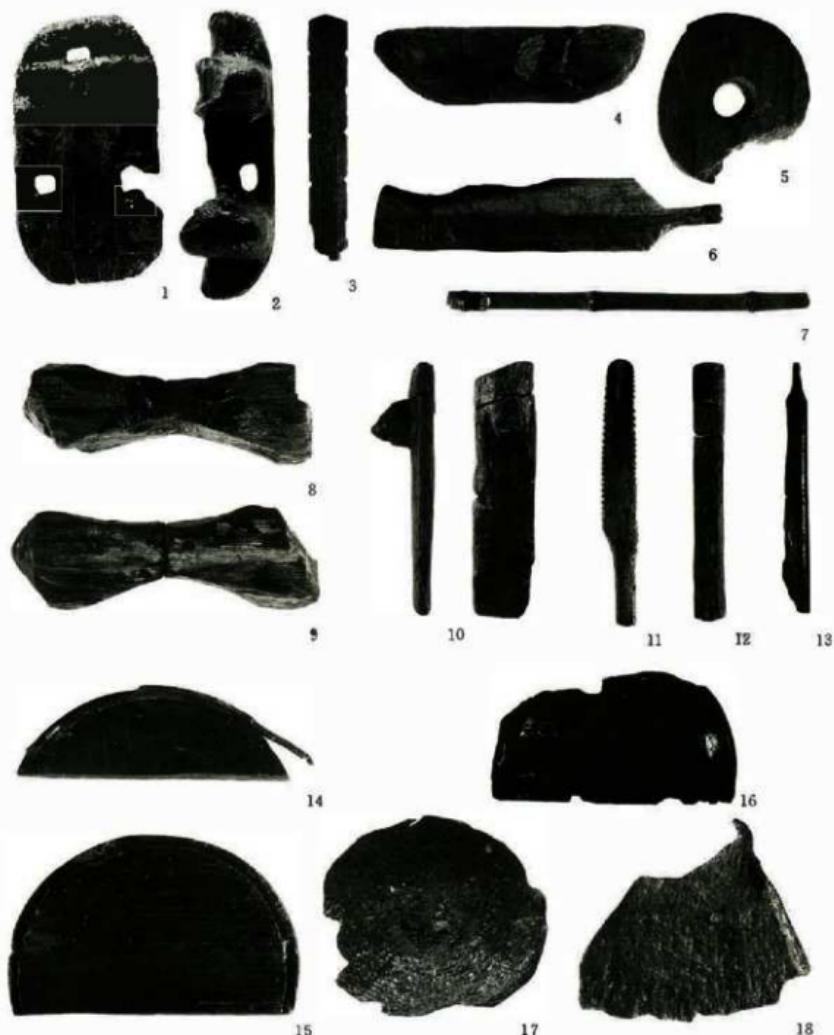
- | | | | | |
|---------------|----------|--------------------|----------------------|------------|
| 1. 土師器 高杯 Na層 | 第23図12 | 6. 石製模造品 | 11. 耳 環 SK5086 第24図4 | |
| 2. * | ◦ SX5123 | 7. 翁 SK5037 第36図4 | 12. * | I層 ◦ 5 |
| 3. * | ◦ 杯 ◦ | 8. 毛 披 SB5167 第26図 | 13. 丸 瓶 SK5081 ◦ 1 | |
| 4. * | ◦ 盖 ◦ | 9. 小 刀 SK5114 | 14. * | SD5029 ◦ 2 |
| 5. * | ◦ ◦ Na層 | 10. 古 錢 第37図 | 15. 巡 方 I層 ◦ 3 | |

図版 17 出土遺物



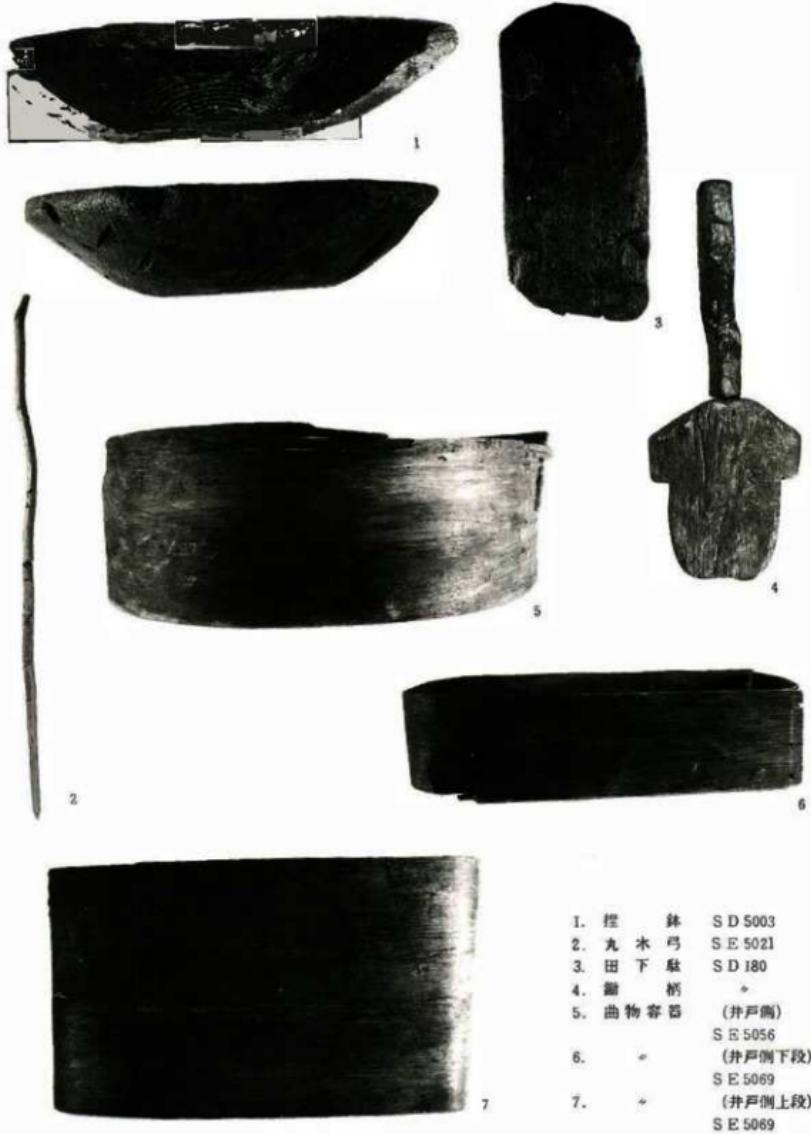
- | | | | | | |
|---------|----------|---------|----------|----------|----------|
| 1. 漆器 盂 | S K 5043 | 5. 漆器 楠 | S D 5003 | 9. 茶葉 筒 | S E 5021 |
| 2. * | S D 5003 | 6. * | * | 10. 木製 鐘 | * |
| 3. * | S D 5051 | 7. * | S E 5008 | 11. * | S D 5003 |
| 4. * | S K 5043 | 8. 柄 矛 | S K 5026 | 12. * | S K 5026 |

図版 18 出土遺物



- | | | |
|--------------------|--------------------|----------------|
| 1. 下 駄 SD 5003 | 7. 用途不明木製品 SK 5026 | 13. 丸木弓 SD 180 |
| 2. * | 8. 木製鍼 SD 180 | 14. 曲物蓋板 * |
| 3. 斎 串 SE 5021 | 9. * | 15. * |
| 4. 身形木製品 SD 5009 | 10. 横斧柄 * | 16. 漆器皿 * |
| 5. 用途不明木製品 SK 5142 | 11. 串状木製品 * | 17. 箕 * |
| 6. * | 12. 用途不明木製品 * | 18. 箕 * |

圖版 19 出 土 遺 物



図版 20 出土遺物

多賀城市文化財調査報告書第27集

山 王 遺 跡

第10次発掘調査概報

（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）

平成3年3月31日 発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発 行 多賀城市中央二丁目27番1号
電 話 (022)368-0134

印 刷 (㈲)伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目1番7号
電 話 (022)362-0805